

石 銚

— 西北九州における縄文時代の石器研究 二 —

目 次

橘 昌 信

はじめに

一、石銚の名称

二、石銚出土の遺跡と遺物

三、つぐめのはな遺跡出土の石銚

四、石銚に関する考察

五、対馬暖流型漁撈文化
おわりに

はじめに

縄文時代の基本的な生業の一つとされる漁撈活動については、東日本の太平洋岸を中心とした研究が進められており、各種の物質的資料の考察から漁撈活動の類型と発達諸段階の把握が積極的に試みられている¹。とりわけ東日本の突き漁業では骨角製の離頭銚をはじめ、固定銚や楳を用いての海棲哺乳類や大形魚類の捕獲に海の幸を対象とした縄文時代人の躍動的な営みが彷彿されるのである。これに反して西日本の縄文時代にあつては漁撈活動を雄弁に物語る資料の出土はあまりにも少なく、網漁業の漁網錘や釣漁業の釣針が散発的に知られている程度であり、突き漁業にいたってはさらに断片的な資料にたよらざるを得ない状況である²。

この様な状態の中で、西北九州を中心とする海岸部に立地する遺跡出土の石銚と推定される石器は、西北九州における漁撈活動の一端を示唆する注目すべき資料と考えられる。

筆者が石銚に関心を持つにいたつたのは、昭和三九・四〇年に調査が実施された長崎県の深堀遺跡³であり、縄文時代後期の「西平式土器」「石銚」に伴つて出土した二点の特異な形態を有する石銚の存在であつた。さらに北九州の山鹿貝塚⁴、榎坂貝塚⁵、また玄海灘に浮かぶ、祭祀遺跡として著名な沖ノ島社務所前遺跡⁶などの発掘調査を通して石銚存在の可能性を一段と確信したのである。さらにその後、九州本土の西北端に位置する北松浦郡田平町の「つぐめのはな遺跡」において多量の石銚が出土していることを聞き、地元採集者の好意により一五〇点を越す資料について実見する機会を得たのである。

そこで、つぐめのはな遺跡の資料を主体にこれまでに知られている石銚の集成を行い、石銚の形態分類、分布、時期それに捕獲対象物、使用法などについての基礎的作業を進め、そこから西北九州における石銚による刺突漁

業の存在および西北九州の漁撈活動について究明したいと考える。

一、石銚の名称

魚類や海棲哺乳類捕獲の一方法に刺突によるものが存在し、その刺突具として猪と銚とに二大別されている。すなわち一般的には柄を持ったまま獲物に突き刺すものを猪とよび、投げつけて突き刺すものを銚として区別されているようである。⁸ 猪は鋭利な先端部と保持する箇所が固定されており、しかも把持したままで船上よりあるいは水中を徒行して、または水中に潜入して用いる道具と考えられている。⁹ 一方、銚は先端部と柄とが離脱する様に装置された「離頭式銚」と先端部と中柄もしくは柄とが固定された「固定式銚」とが存在し、前者では先端部を形成する銚先（銚頭）に、後者は中柄あるいは柄にそれぞれ索縄が施されている。¹⁰ この様に猪と離頭式および固定式銚とは、その構造上に違いがみられ、使用方法は無論のこと使用場所や対象物にも大きな相違が当然出て来るわけである。

しかしながら先端部のみで、しかも石製品の遺物ではそれが固定されていたものなのか、あるいは離脱する様に用いられたのか、はたまた中柄の存在や索縄のための装置などを明確に判断することは不可能とさえ思える。一方それ以前の基本的な問題として、野山のイノシシやシカを主要な対象物とした狩猟用の槍先との区別も石器自体から困難と考えられる。すなわち、すべての道具はその物理的作用に即応して形態が決定され、それによって機能が発揮されるゆえ海棲哺乳類や大形魚類を対象にしても、あるいはイノシシやシカなどの中形哺乳類を刺突によって捕獲するにしても、その目的を遂げるには柳葉形の外觀、するどい先端、鋭利な側辺部が基本的な形

態として具備されることになる。

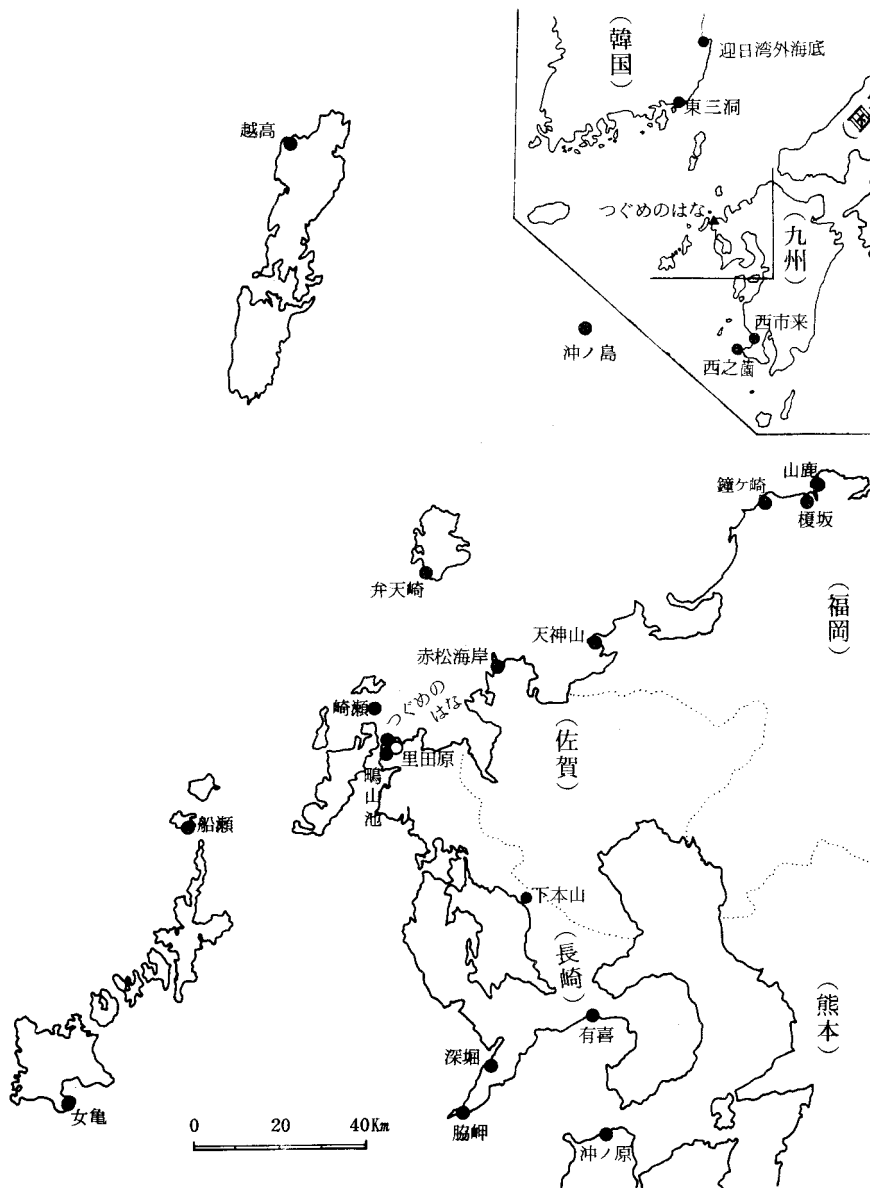
これら基本的な問題も含めてその用途や対象物を容易に判断する事が困難な石器を敢て「石鋸」という名称を附したのは主として次の理由によるものである。

まず石鋸を出土している遺跡がいずれも海岸沿いに集中して分布し、しかもその大半が岩礁性の海岸で外洋に面していると言う遺跡の立地である。次に貝塚出土の自然遺物の中に大形の魚類や海棲哺乳類が遺存しているにもかかわらずそれらの捕獲を推定させる道具類が皆無に近い状況であること。さらに後世の例であるが、形態的に極めて類似した石器が石鋸として使用されている具体的な資料が知られていること。また九州の縄文時代において、狩猟具としての槍先形石器が稀な存在で、シカ、イノシシなどの狩猟における主体的な道具と考えられないことも理由の一つとしてつけ加えることができるであろう。

一方、先端部のみでは鋸と稽の区別は容易でなく、先端部と柄あるいは中柄とが固定もしくは装着を裏付ける状況での資料の検出は今後も期待できそうもないと判断して石鋸の名称を用い、さらに鋸としての使用法を想定して論を進めたい。¹²

二、石鋸出土の遺跡と遺物

(一) 有喜貝塚¹³〔長崎県諫早市有喜町、第一図版(1)〕



第1図 石鈔出土遺跡分布図 (●縄文 ○弥生)

	遺 跡 名	時 期	所 在 地	註
1	山 鹿 貝 塚	縄 前・後	福岡県遠賀郡芦屋町	4
2	榎 坂 貝 塚	縄 後	〃 遠賀郡岡垣町榎坂	5
3	鐘ヶ崎 貝 塚	縄 後	〃 遠賀郡玄海町鐘崎	14
4	沖ノ島 社務所前遺跡	縄 前・中	〃 宗像郡大島村沖ノ島	6
5	天 神 山 貝 塚	縄 後	〃 糸島郡志摩町	18
6	赤 松 海 岸 遺 跡	(不 明)	佐賀県東松浦郡鎮西町	20
7	つぐめのはな遺跡	縄 前・中	長崎県北松浦郡田平町	7
8	鷗 山 池 遺 跡	縄 前・中(?)	〃 北松浦郡田平町	22
9	里 田 原 遺 跡	弥 中	〃 北松浦郡田平町	19
10	崎 瀬 遺 跡	(不 明)	〃 平戸市度島	24
11	弁 天 崎 遺 跡	縄 中(?)	〃 豊後郡ノ浦鎌崎	31
12	越 高 遺 跡	縄 前	〃 上県郡上県町越高	26
13	船 瀬 遺 跡	(不 明)	〃 北松浦郡小値賀町	23
14	女 亀 遺 跡	縄 中(?)	〃 南松浦郡富江町女亀	32
15	下 本 山 岩 陰 遺 跡	縄 前～後	〃 佐世保市下本山町	25
16	深 堀 遺 跡	縄 後	〃 長崎市深堀町	3
17	脇 岬 遺 跡	縄 後	〃 西彼杵郡野母崎町	30
18	有 喜 貝 塚	縄 中・後	〃 諫早市有喜町	13
19	沖ノ原 貝 塚	縄 中・後	熊本県天草郡五和町	21
20	西 市 来 貝 塚	縄 後	鹿児島県日置郡市来町川上	28(a)
21	西 之 薮 遺 跡	縄 前・後	〃 川辺郡笠沙町	27

表 1 石鈷出土遺跡地名表

千々石湾に面する標高七Mの崖上に営まれている貝塚で、貝層中より「阿高式・南福寺式・出水式・鐘ヶ崎式」など縄文時代中期から後期にかけての土器が出土している。石器では石斧・石鏃と共に「戈形石器」として報告されている石器が一点存在しており、いずれの土器に伴出したか不明であるが中期あるいは後期いずれかの石鈷と考えられる資料である。

(1) 全長は四cmではほぼ二等辺三角形を呈し側面に各々一個の抉りが施され、彎曲した基部は左右で異なった形をしている。大正一四年の調査によるものであり石鈷の発見例として最も古いものとされる。石材については玄武岩製とも安山岩製とも言われ定かでない。

(二) 鐘ヶ崎貝塚¹⁴
 町鐘崎、第一図1/5
 〔福岡県宗像郡玄海

玄海灘に面した砂丘上の貝塚で上八貝塚とも呼称され、九州における縄文時代後期の代表的な土器である「鐘ヶ崎式」のタイプサイトとして古くから周知されている遺跡である。アサリ・カキなど鹹水産の貝類を主体に淡水産の貝が僅かに混じり、貝類と共に獣骨・魚骨・鳥骨などの自然遺物が知られている。石器では石鏃・スクレイパー・石匙・石斧それに石銛など約四〇点が出土している。この他骨製のヤス・貝輪・サメ歯製耳飾と遺物はかなり豊富である。

1はサヌカイト製の扁平な横剥ぎ剝片を素材に用い、周辺からの二次加工によって全体を木葉形に整え、基部の方は僅かであるが舌状を呈している。2もサヌカイトの横剥ぎに近い剝片を利用して周囲から大小の剝離が施され、一側辺にのみ顕著な肩を形成している。3は比較的大きく厚味のあるサヌカイトの剝片を使用しており、やや角度の大きい先端部は主要剝離面の方向からの小さな調整剝離によって整形されている。これに反して両側辺には大きな剝離が施され左右シンメトリーでない肩を有している。4は一面のみ周辺からの加工が施されているのに対し、片方は舌部の一部のみで他は表皮がそのまま残されている。全体の形は筥状を呈し、先端部の鋭利さを欠いており刺突具と判断するには問題が残り、むしろ孤状の刃部を必要とする用途が推定されるであろう。舌状の基部の形成はその延長上に柄の装着が予想され、もし漁具として考えるならば、いわゆる「鮑おこし」としての形態に類似していると言えよう。5は厚味のある剝片の周辺に加工を施した尖頭状の石器で他と同様にサヌカイト製である。刺突具として極めて普遍的な形態を持っており、この石器を直ちに石銛と限定するのは困難であろうがその可能性は残されているものと思われる。

以上五点の鐘ヶ崎貝塚出土の石器のうち、1と3は石銛と考えられるものであり、形態的には木葉形と柳葉形で

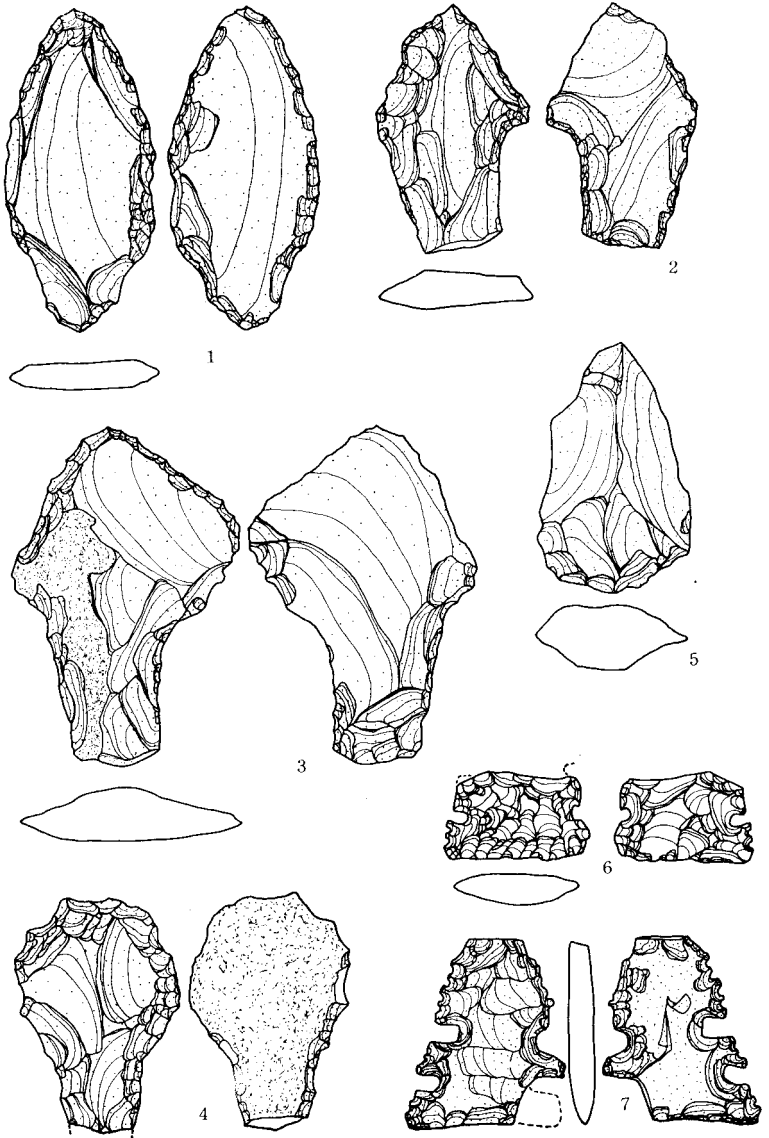
舌部を有するものと、一側辺ないし両側辺に肩を持つもの二つが認められるが舌状の基部を有する点では共通している。4・5については更に検討を要する資料とされよう。

(三) 深堀遺跡¹⁵ 〔長崎県長崎市深堀町、第二図6・7〕

長崎半島の西海岸のほぼ中央に位置し、長崎湾に接する一種の砂丘遺跡であり、弥生時代および縄文時代の遺構・遺物が発見されている。当遺跡で二点の石鋸が縄文時代後期の西平式土器に伴って出土しており、しかも石鋸との共伴は鋸歯状の側辺を有する石鋸だけに特別注目される。後期の包含層出土の石器類はかなりの数にのぼり、主要なものとして、石鏃・石錐・スクレイパー、刃器などの剝片石器と、石斧、尖頭状礫器、敲石類、石錘などがあり、その種類は極めて多彩である。

6は黒耀石製で両面とも周辺からの二次加工が全面におよんでおり、基部よりの側辺に大きな抉りが各一つと先端部近くの一側辺には鋸歯状の整形が施されている。先端部を欠損しているが長二等辺三角形を呈するものと推測される。7はサヌカイト質の剝片を用いたもので、やはり先端の一部を欠いているものの、全体の形は長二等辺三角形に整えられている。側辺にはやや大きな抉りが二個施され、先端部よりの両側辺は鋸歯状の小さな二次加工がみられる。形態的には複式の石鋸を背中合わせて二個並列させ、さらに先端部に鋸歯状の石鏃を結合させたものと共通する極めて特徴的な形態を有している。

西北九州の海岸部の遺跡で集中的に出土している石鋸と鋸歯状の石鏃が組み合わせ道具として使用された可能性を示唆する石器として注目される。深堀遺跡出土の扁平で鋸歯状の側辺を有し、三角形の形態を呈する二点の



第2図 各地の遺跡出土の石鈿(I)〔1~5 鐘ヶ崎, 6・7 深堀〕

石器は石鈿の特徴的なタイプの一つとして把握され、しかも縄文時代後期という点も明確にされている。

(四) 山鹿貝塚¹⁶〔福岡県遠賀郡芦屋町、第三図8、10〕

響灘に注ぐ遠賀川河口近くの砂丘上に営まれた縄文時代の貝塚で、前期、中期、後期それにくく少量の晩期の遺物が出土している。埋葬人骨と共に各種の着装品が発見されていることで特に有名な貝塚であり、着装品の中にサメ歯製の耳飾が認められる。自然遺物の貝類では、前期はハマグリ、イソシジミが多く、これに対して後期ではマガキが圧倒的に多くなり貝塚周辺の環境の変化が把握されている。魚骨では前期にマダイ、中期はヘダイとクロダイ、さらに後期ではクロダイというように時期によって主体を占めるものが異なり、捕獲対象物の組成にも変化が認められている。この様に漁撈活動が盛んであったことが骨角製品である釣針やヤスなどの存在にも示唆されている。一方石器類も多量に認められ、発掘および採集資料の一部を合わせただけでも一五〇点を越えている。九州の縄文時代に普遍的な石器の他、石鈿、石鋸、サイドブレイド、彫器などが出土しており、その大半は後期と中期の資料で占められている。

8は比較的大形のサヌカイト質の剝片を素材に表裏とも全面におよぶ大小の剝離が施され、一方の面は全体の形を整えるための大きな剝離であるのに対し、もう一方は縁辺に沿っての細部調整の小さな剝離が並んでいる。先端部は鋭く、両側辺のほぼ中央には肩を有し、さらに基部は舌状を呈する整った形態で典型的な石鈿と考えられる資料であり、縄文時代後期の土器に伴っている。9も後期の資料であるが、形態的に異なっている。すなわちこの石器の最大幅は基部近くにありしかも左右の形が著しく相違する肩を有しており石鈿の形態上のバリエ

イシヨンを示す資料と考えられる。サヌカイト質の縦剥ぎの剥片を用い二次加工は周辺部に集中してみられる。10は縦に長いサヌカイトの剥片を素材に先端部と基部とにやや粗い剥離が施されており、全般的に複雑な様相を呈している。先端部は幾分丸まり両側辺の中央部で肩を張り出し基部へ向っては急激に細まっておりあたかも先端部を想定させる。全体的な形態は8に類似しているものの、先端部や肩の張りさらに尖り気味な舌状の基部などの細部、それに二次加工のあり方などで異なっている。中期の時期が考えられている資料である。

山鹿貝塚出土の三点の資料はそれぞれ形態的に異なっており形態の多様さを示すと共に、当貝塚の環境や具体的な自然遺物の遺存から石銛としての用途が推測されるであろう。

(五) 沖ノ島社務所前遺跡¹⁷〔福岡県宗像郡大島村、第一図版(2)・(3)〕

玄海灘に浮かぶ絶海の孤島である沖ノ島は古代祭祀遺跡―海の正倉院―として余りにも有名であるが、同時に切り立った崖上の縄文および弥生時代の生活遺跡の存在もその地理的環境から大いに興味をもたれるところである。縄文時代の遺物は前・中期を主体に若干の晩期のものが出土している。石器は石鏃をはじめ石匙、スクレイパー、石錘、蔽石、磨石、石銛、それに4cm近い大形の鎌形石器などで、九州本土の海岸近くに立地する遺跡のそれらと基本的に一致している。周囲わずか4kmのこの島ではシカ・イノシシなどの哺乳類の棲息は皆無であり漁撈活動に生業の中心が置かれていたであろう事は想像に難くない。実際、社務所前遺跡および岩陰遺跡から出土している自然遺物にはそれらは認められず、逆にアシカ類などの海棲哺乳類の骨が検出されており、当遺跡の生活を考察する上で重要視される。

(2)はサヌカイト製の扁平な剝片を素材に、周辺に沿って表裏からの二次加工が施され全体を整形している。先端部は鋭く尖り、丸味を有する胴部は基部近くで細く尖っており胴部と舌状の基部とが明瞭に区別されている。

(3)は黒耀石製の資料であり、側辺に沿っての集中的な剝離が見られ全体の形は木葉形を呈するものの、基部は左右異なる短い舌部を形成していると見なされる。

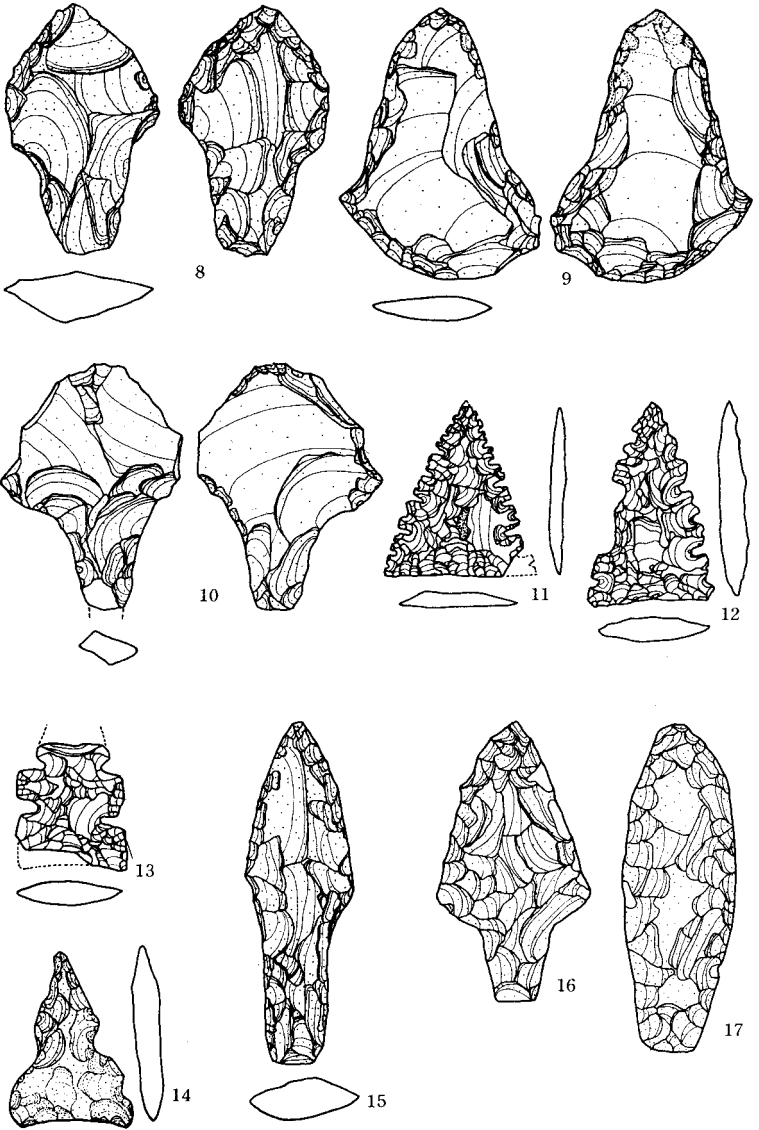
沖ノ島という極めて特殊な自然環境から考えて、この前期もしくは中期の二点の石器は第一次調査出土の3cmを越える大きさの鏃形石器や大形の両面加工の尖頭器と共に海へ向っての用途が当然推測できる資料とされるであらう。

(六) 天神山貝塚¹⁸ (福岡県糸島郡志摩町、第三図11)

当貝塚は博多湾と唐津湾に挟まれた玄海灘に突出した志摩半島北西端に位置しており、縄文時代後期を主体に一部前期、早期の遺物が出土している。自然遺物が豊富で貝類ではハマグリ、ハイガイ、アサリなどの内湾性のものと、サザエ、アワビなどの岩礁性の貝が出土している。一方魚骨ではエイ類、サバ、アジ、スズキ、タイ類などの他、大形魚のサメ類、それにクジラ類も認められる。骨角器、貝器も多彩で、釣針、刺突具、筭、垂飾品、貝輪、片口汁器などが発見されている。石器では鋸歯状の石鋸一点と石鋸の二点は特に注目される資料である。

11は黒耀石製の二等辺三角形をした石器で、直線的な両側辺は石鋸の刃部に見られる複式の鋸歯状の加工が丹念に施されている。四・五×四・一cmという長さ・幅に比較して、厚さは極端に薄く〇・三cmを測る。

天神山貝塚出土のこの石鋸は後期初頭の「中津式土器」のほぼ単純層からの出土であり、二点の石鋸や骨角製



第3図 各地の遺跡出土の石鈿(Ⅱ)〔8~10山鹿, 11天神山, 12里田原, 13赤松海岸, 14神ノ原, 15鴨山池, 16・17船瀬〕

縮尺 $\frac{1}{2}$

の漁撈具、それにサメ類、クジラ類と共伴しているだけに用途の理解を容易にするものと思われる。また大きさに比べて厚さの薄いことは明らかに柄のない中柄の装着が意識されているものと推察される。

(七) 里田原遺跡¹⁹〔長崎県北松浦郡田平町、第三図12〕

九州本土の最西北端に位置する田平町の海岸近くの盆地に立地している弥生時代を主体とした遺跡である。中期の「城ノ越式土器」をはじめ、各種の打製および磨製の石斧、それに豊富な木器類を出土していることで注目されている。遺構も多く貯蔵穴群、杭列、敷石遺構などが確認されている他、獣骨、魚骨などの自然遺物も見られその中にはクジラ類、イルカ類、それにサメ類などが出土している。第一〇次調査において問題の黒耀石製の石鋸一点が発見されている。

12は黒耀石製の大形の剝片を用い、周辺からの二次加工によって二等辺三角形に整形されており、両側辺は鋸歯状の小さな抉りが並び基部はわずかに内彎している。

里田原遺跡出土の資料は既に述べた深掘遺跡や天神山貝塚出土の石鋸と同じタイプと考えられるものであるが時期は異なっている。当遺跡のそれは弥生時代の所産とされるだけに特に注意される必要があるであろう。また当遺跡において出土している螻の頭状の尖端をもつ木器はその形態からして刺突具とされるであろうし、漁撈用の鋸とも考えられるだけに一段と興味がもたれる。

(八) 赤松海岸遺跡²⁰〔佐賀県東松浦郡鎮西町、第三図13〕

東松浦半島の突端近くに位置し、文字通り海岸に面している遺跡での採集資料で、時期については全く不明である。

13は黒耀石製の剝片を素材にその表裏全体におよぶ二次加工が施され、ほぼ二等辺三角形を呈している。側辺部は細部加工によって二個の抉りを形成しており、基部はやや内彎している。先端部と基部の一端を欠損しているものの、側辺が大きな鋸歯状の抉りを有する石銛の一つのタイプを示すものと考えられる。

(九) 沖ノ原貝塚 〔熊本県天草郡五和町、第三図14〕

天草下島北端の島原湾と天草灘に挟まれた早崎瀬戸に面する海岸に位置している縄文時代中期および後期を主体とする砂丘上の岩礁性の貝類を中心とする貝塚である。石器は石鏃、石匙、石斧の他に漁撈活動に関係があると目される尖頭状礫器、石錘、それに石銛などがあり、この他牙および骨製の刺突具、釣針が出土している。また土器の底部に海棲哺乳類の骨によるスタンプが見られ、間接的にはあるが海棲哺乳類との係わりが示唆されている。

14は当貝塚で「阿高式土器・南福寺式土器」と一緒に採集された石銛と考えられる資料である。安山岩質の石材を用いており、周辺からの二次加工によって先端部を鋭利に整形し、さらに側辺にはノッチ状の抉りが施され基部は内彎している。

当貝塚の石銛の全体的な形状は有喜貝塚のものとの類似性が指摘されるであろう。この資料の他に深堀遺跡出土の鋸歯状の先端部と石銛二個を組み合わせた形態を有するサヌカイト製の石銛も採集されている。

(十) 鳴山池遺跡²² 「長崎県北松浦郡田平町、第三図15」

平戸瀬戸に面する田平町の西海岸から東の方へ約〇・七Km山手に入った池の縁において石鏃と共に採集された資料であり、土器は認められなくその明確な時期については不明といわざるを得ない。ただ後で述べるつぐめのはな遺跡とは極めて近接した距離に所在しており、しかもつぐめのはな遺跡において多量に出土している石銚の形態と極似している事もあり、時期については縄文時代前期もしくは中期が推定される。

15はサヌカイト質の横剃ぎの剝片を素材に用い、丹念な二次加工によって鋭い柳葉形の先端部・胴部を形成し基部は細長い舌状を呈している。石銚と推定される石器の一つのタイプを示す好資料とされる。

(十一) 船瀬遺跡²³ 「長崎県北松浦郡小値賀町、第三図16・17」

五島列島の一つをなしている中通島の北に所在する小値賀島の南に開ける船瀬の海岸近くにおいて、石鏃、石斧、剝片などの資料と共に採集された資料である。その時期については不明である。

16はサヌカイト質の石材を用いて周辺から全面におよぶ二次加工によって整形されている。鋭い三角形の先端と突出した角ばった肩を有し明瞭に区分された舌状の基部とからなっている。17はサヌカイト質の石材を使用している点で16と同じであるが、その形態は先端、基部とも鋭さを欠いた柳葉形をしている。

(十二) 崎瀬遺跡²⁴ 「長崎県平戸市度島、第四図18」

平戸島のすぐ北に周囲一〇Km足らずの細長い度島が位置しており、遺跡は東側の小さな岬に立地している。多くの石鏃と共に採集されている石器に石銛と考えられる資料が一点みられる。

18は玻璃質安山岩製で長二等辺三角形に近い形態を有し、側辺の両側にそれぞれ小さな袂入と胴部から基部にかけての両面の中央に研摩がみられる極めて特異な石器である。側辺の袂入部はこの石器と柄との装着を意図して加工されたものと考えられ、紐ずれと推測される擦痕が観察される。一方両面の研摩はこの石器の最も厚味のある箇所に行われており、やはりこの石器と柄の装着がより密着されることを目的とした加工とされよう。

(一三) 下本山岩陰遺跡²⁵ (長崎県佐世保市下本山町、第一八図一)

相浦川の河口を約四Kmさかのぼった標高約一六Mの段丘上の砂岩に形成された岩陰遺跡で、一部貝層を伴っている。縄文時代前期の「曾畑式土器」を主体に、中期の「阿高式土器」、前期の「轟式土器」それに後期の磨消縄文の土器などが出土している。石器、骨角器、貝器と人工遺物は豊富であり、自然遺物についても多彩である。これらの遺物の中に、安山岩製の「石槍」とされた石器が一点みられる。

1は最大長が一七・三cmもある大形なもので、五・二cmの最大幅は先端部よりあり、ほぼ長方形をした長い舌状の基部を有している。この形態の石器は先で述べる西市来貝塚やつぐめのはな遺跡で出土している石器と類似しており、また当遺跡出土の大形結合釣針やサメ類・エイ類など大形魚類の存在等を考慮して、漁撈具の「石銛」と考えたい。すなわち、結合釣針と共に外洋性漁撈の存在を示唆する資料といえよう。

(一四) 越高遺跡²⁶〔長崎県上県郡上県町大字越高、第四図19〕

上対馬の西海岸、朝鮮海峡に面した海岸と隣接して遺跡が存在している。調査の結果では「前平式・越高式土器」など早期末の時期が想定されている。この時期の他の石器と共に石鋸が一点出土しており、また自然遺物の中にクジラ類の肋骨・椎骨なども発見されている。

19はほぼ正三角形をしており両側面に先端の尖った鋸歯状の加工がみられる。全体の加工も周辺に沿って集中的に施されており、中央部には主要剝離面と大剝離面を残している。頁岩製。対馬という遺跡の環境が注目されるよう。

(十五) 西之園遺跡²⁷〔鹿児島県川辺郡笠沙町赤生木、第四図20、22〕

薩摩半島西岸の岩礁性海岸が発達した環境に立地するこの遺跡は縄文時代前期の「轟式土器」および後期の「市来式系土器」「北久根山式土器」を主体とする時期が考えられている。剝片石器の出土が顕著であり、この中に石鋸の一つのタイプを構成すると思われる鎌形石器三点がみられる。従来西北九州にはほぼ限定されていただけに、当遺跡の資料は重視されよう。

20・21は長二等辺三角形をして、基部に決りをもつもので、石鎌を大形化したものと形態的には全く符合するものである。一緒に出土している四〇点近い数の石鎌に比較するとその大半と最大長において二倍以上の開きが認められ、大きさの違いからくるであろう用途の差異が当然考えられよう。20は粘板岩製、21は安山岩製である。22は前の二者と形態、加工それに石材の上でも異なっている。すなわちこの石器の最大幅が胴部から基部へ

かけての箇所位置し、しかも基部に挟りが施されていないのである。しかしながら鋭い先端部はこの石器が刺突を目的としていることを知るのに充分である。黒燧石製。

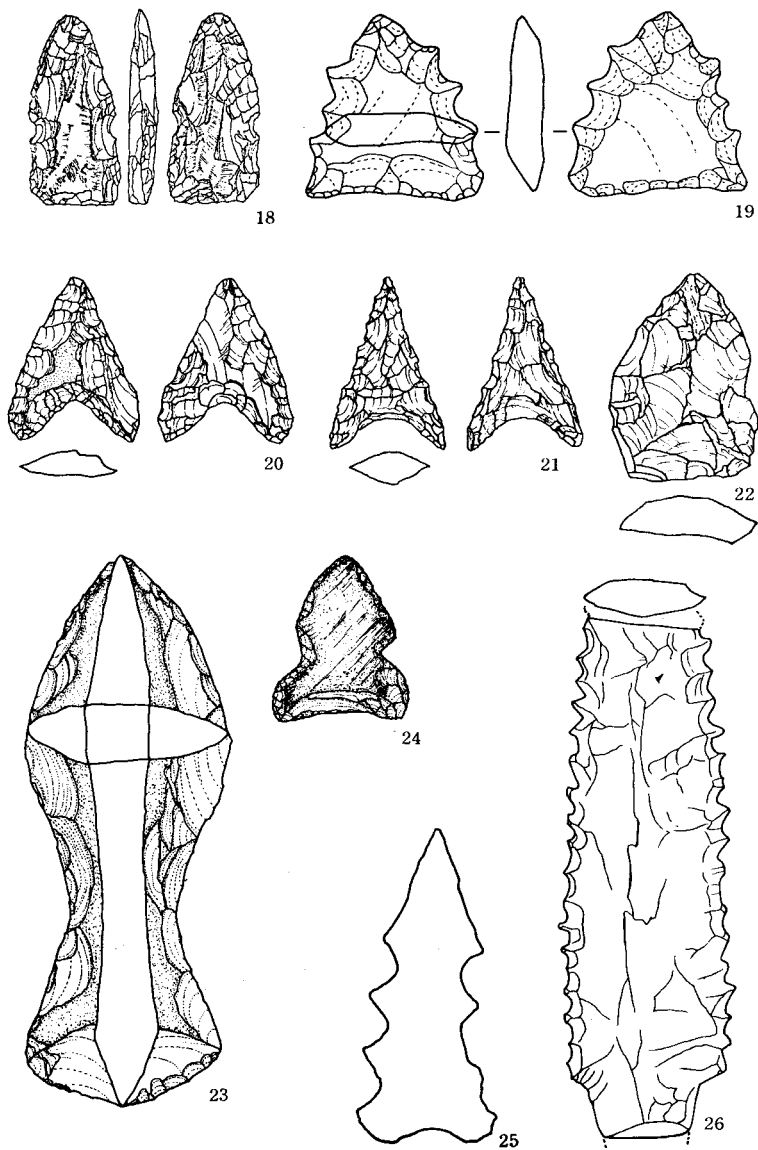
(十六) 西市来貝塚²⁸ 〔鹿児島県日置郡市来町川上、第四図23〕

薩摩半島西海岸のつけ根に位置する西市来貝塚は九州の縄文時代後期のタイプサイトとして知られている。当貝塚の出土遺物の中に「石銚」として紹介されている石器は、まさに石銚の一つのタイプを示す好資料と考えられる。大きなサヌカイト質の剝片が素材に用いられており、二次加工は両面の周辺に沿って集中的に施されている。最大長は一四・五cmを測り、五・五cmの最大幅は中央よりやや上位にあり、木葉形の尖頭部を形成している。下半部の胴部から基部へかけての両側辺はゆるく彎曲しており、あたかも大きな柄の装着を目的としているようである。

これまで石銚と考えられる石器は九州西北部の海岸や島に集中しているだけに、薩摩半島西海岸に立地する西市来貝塚や先に挙げた西之蘭遺跡出土の資料は天草灘からさらに南への拡がりを示唆しており注目される。また西市来貝塚において出土しているクジラ類の骨は石銚の用途を考察する上での貴重な資料とされよう。

(一七) 榎坂遺跡²⁹ 〔福岡県遠賀郡岡垣町糠塚〕

遠賀川西側の響灘の海岸から約一・五km南へ入った古砂丘末端に位置する縄文時代後期の遺跡で一部に貝塚が形成されている。土器は「中津式・阿高式系・北久根山式・鐘ヶ崎式」の諸型式が見られ、一方石器も豊富で石



第4図 各地の遺跡出土の石鋸(Ⅲ)〔18 崎瀬, 19 越高, 20~22 西之園, 23 西市来, 24 国府, 25 東三洞, 26 迎日湾外海底〕 縮尺 $\frac{1}{2}$

斧・石鏃・石皿・砥石などと共に黒耀石製の石鏃と石銛が出土している。骨角器類では釣針・貝輪などが認められ、獣骨・魚骨も多数検出されている。

(一八) 脇岬貝塚³⁰ 〔長崎県西彼杵郡野母崎町〕

天草灘に向って突出した長崎半島の南端に位置する砂丘上の遺跡で、「鐘ヶ崎式・北久根山式」など後期の土器を主体としている。釣針をはじめ漁撈具と考えられる骨角器類が極めて顕著であり、石器類も豊富で石銛と推測される石器が出土している。

(一九) 弁天崎遺跡³¹ 〔長崎県壱岐郡郷ノ浦鎌崎〕

壱岐の南西に位置する郷ノ浦の南に突出する鎌崎の海岸で多量の石器が採集されており、それらの中にサヌカイト質製の大形の石銛と考えられる石器が認められる。

(二〇) 女亀遺跡³² 〔長崎県南松浦郡富江町女亀〕

下五島福江島の南端近くの海岸に接した遺跡で、古くから多量の石鏃が出土する事で有名である。当遺跡において石鏃と共に全体の形状がほぼ三角形で側辺部に大小の抉りを有する黒耀石製・サヌカイト質製の石銛と推定される石器が採集されている。採集された土器の大半は滑石混入の縄文時代中期の「阿高式」であり、石銛の時期を示唆している。

(二一) 国府遺跡³³ 〔大阪府南河内郡美陵町国府、第四図24〕

国府遺跡の資料中に「アメリカ式大形石鋸」として紹介されている石器が一点存在している。24はサヌカイト製で全長四・二cm、幅三・三cmで、両側辺の基部より比較的大きな抉入が施され基端はゆるやかに彎曲している。二次加工は周辺に集中している。この石器が石鋸であるとは直ちに判断できないであろうが、西北九州において出土している石鋸と考られる石器と形態的に極めて類似している点は注目されよう。今後、西北九州以外の地における特徴的な形態を有する石器の存在を考える上での一つの資料となり得よう。

(二二) 東三洞貝塚³⁴ 〔第四図25〕

釜山港内に所在する影島の汀線近くに立地している東三洞貝塚は韓国南部における代表的な遺跡としてよく知られている。この貝塚からは九州の西北部の遺跡で見られる石鋸や結合式釣針が、また側辺に鋸齒状の抉入を有する石鋸が出土していることでも注目されている貝塚である。自然遺物の出土も多彩で、海棲哺乳類のクジラ・イルカ・アザラシが報告されている他、サメ・タイ・サハラなども記載されている。25は東三洞貝塚出土の石鋸とされる石器の形態を示したものである。三角形をした鋭い先端とそれに続く両側辺には比較的大きな抉入が各三個施され、基端も彎曲している。遺跡の立地および自然遺物から石鋸と判断することができよう。

(二三) 迎日湾外海底³⁵ 〔第四図26〕

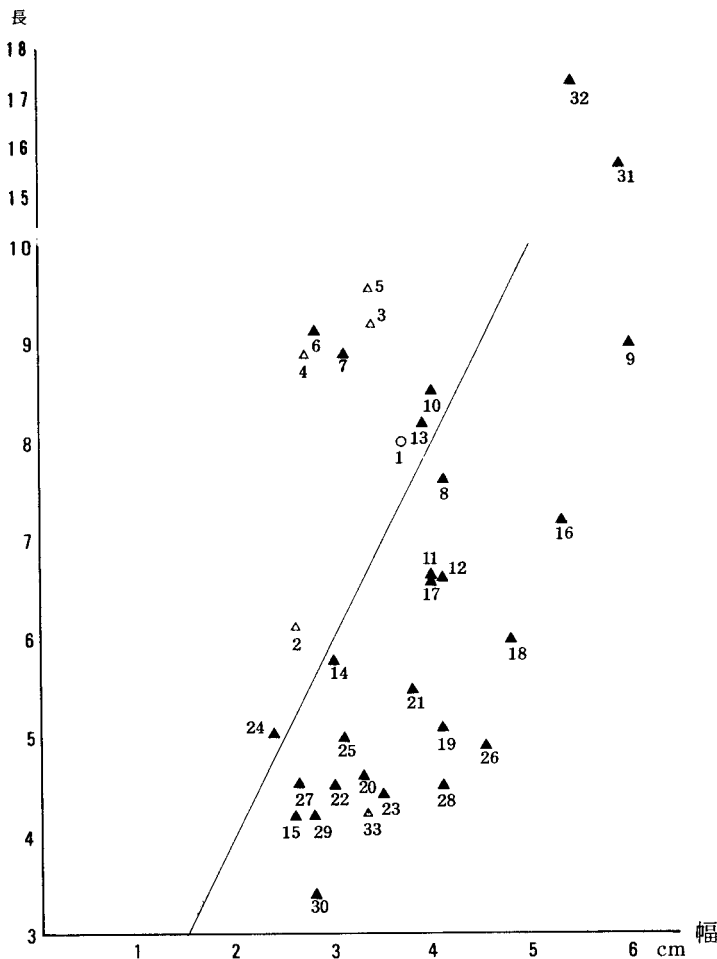
26は韓国東海岸南部の迎日湾外の海底から発見された石銛の一種と考えられる石器である。柳葉形に近い形状で両側辺には石鋸と同様な小さな鋸齒状の加工が丹念に施されている。基部の一端を欠損しているものの舌状の基部が存在していた事は明らかである。この石器の柳葉形の外観、鋸齒状の側辺それに舌状の基部から石銛としての用途が充分推測されるであろう。また底曳網によって海底から引き揚げられたものであるため明確にし得ないが、韓国南部の東海岸は対馬暖流の一支流の流路にあたっているだけに刺突による漁撈具の一つとして考えることができよう。

以上の様に西北九州の海岸部を主体にした諸遺跡において、断片的ではあるが石銛と考えられる石器を認るところができるのである。従来から知られている鋸齒状の側辺を有する特徴的なもの以外にも石銛を想定できる石器の存在を知るのである。形態および大きさの上でもバリエイションが見られるようであり、第五図は各地の遺跡出土の石銛と考える石器の大きさ(長さと幅)を示したものである。

三、つぐめのはな遺跡出土の石銛

(一) 遺跡と遺物

つぐめのはな遺跡は昭和四六年個人宅地造成に伴う緊急調査として長崎県教育委員会によりその一部が発掘されたが、それ以前から土地の所有者および地元研究者、高校生などによって多数の資料が収集されている。石銛



1 東三洞。2~5 土佐沖捕獲鯨発見の鋸(2・3石鋸, 4骨鋸, 5キテ)。6 嶋山池
 7・8 船瀬。9~12 鐘ヶ崎。13~15 神ノ島。16・17 山鹿。18 深堀。19~20 沖ノ原
 21~23 西之麓。24 崎瀬。25 里田原。26 越高。27 女屯。28 天神山。29 有喜。
 30 覆坂。31 西市来。32 下本山。

第5図 各地出土の石鋸の大きさ(長幅)

と考えられる石器だけでも一五〇点を越えており、それに他の石器、土器、自然遺物などを加えると相当の数のぼる資料が採集されていることになる。以下実見する機会を得た採集資料を主体につぐめのはなの石銚についてみることにしたい。

遺跡 つぐめのはな遺跡は九州本土西北端に位置する長崎県北松浦郡田平町の野田免に所在し、平戸島とは平戸瀬戸を挟んで指呼の間にある。遺跡は田平町西海岸の平戸瀬戸に面する海岸およびその崖上に立地し、隣接する「ハエ崎」までのかんりの広範囲にわたって遺物の散布が現在も認められる（第六図）。実際採集品の石器には明らかに水による磨滅と判断できるものや、それらが全く観察されないもの両者がみられる。

つぐめのはな遺跡の一部を形成していると思われるハエ崎は昭和の初めまで捕鯨の基地が存在しており、この基地で行なわれていた平戸瀬戸の捕鯨について土地の古老から話しを聞くことができた。その概略を記すことによつてつぐめのはな遺跡の立地の補足としたい。

ハエ崎の海岸に二×三間ほどのタマリと呼称される鯨納屋が、一方崖上には約一坪ほどの見張り小屋がそれぞれ設けられ捕鯨漁の基地とされており、今も海岸に建物の基礎である石垣の一部を見ることができ、平戸瀬戸の捕鯨基地はハエ崎の他に二ヶ所あり、その一ヶ所は平戸瀬戸の南の入口にあたる平戸島の大崎である。この大崎とハエ崎は平戸瀬戸を挟んで対角線上に位置しているが両者の中間に平戸島から東へ向けて突出した中崎の岬によつて北のハエ崎と南の大崎の基地にある見張り台同志の連絡が不可能なため、両者から遠望できる中間地点の坊田に残りの一ヶ所が設けられている。平戸瀬戸に面するこれら三ヶ所の基地の連携プレーによつて鯨の発見から捕獲、さらに解体までが共同で行なわれている。



第6図 つぐめのはな遺跡の位置（○印）

平戸瀬戸では毎年四〜五月にかけてそれぞれのタマリに鉄砲打ち、ハダシ（鋸打ち）それにノリコ十数人が待機しており、一シーズンに数回、南から平戸瀬戸へ回遊するナガスクジラの捕獲を行なっているのである。ノリコ達は平時タマリで竹細工やワラ細工の内職を行ないひとたび大崎からの鯨発見の情報がハタとノロシによって伝えられるやいなや、各所で待ち受けてあるいは追っての壮絶な闘いがくりひろげられるのである。最近まで行なわれていた捕鯨の一基地の存在がつぐめのはな遺跡の立地および環境を端的に物語っているものと思える。

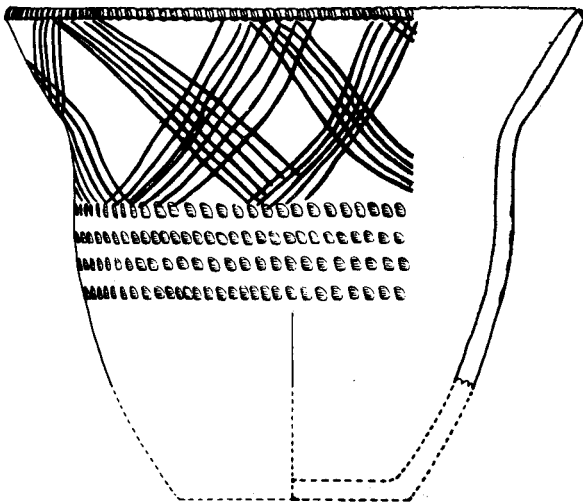
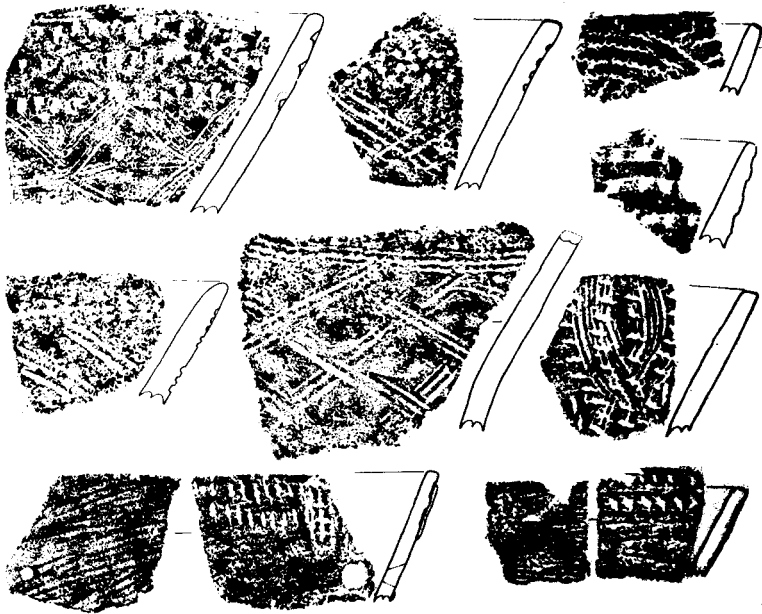
遺物 採集された資料のうち、土器は石器に比較すると極めて少ないのであるが、石鋸の時期を想定する上でのメルクマールになるので簡単に触れておく。

採集された土器の大半は刺突文、爪形文、押し

き文、それに格子状の沈線文などをモチーフとするもので、それらは二枚貝および巻貝が施文具として用いられている。器形は口縁部が朝顔状に外反し、胴部から底部にかけてほぼ円筒形を呈するものが基本とされ、従来「塞ノ神式」あるいは「柏田式」と呼称されている土器に対比させることができよう。他に細い隆帯を貼りつけた「轟式土器」や滑石混入のみられる凹線文の「阿高式土器」が少数認められる。第七図はつぐめのはな遺跡採集の主要な土器であり、西北九州においてこれまで断片的にしか知られていなかった「塞ノ神式土器」が相当数みられ注目される。³⁶

昭和四六年の県の調査結果では、³⁷Ⅰ・Ⅱ層から阿高系土器が少量出土し、Ⅲ～Ⅶ層から轟式を主体とする土器が出土しているようであるが詳細は不明である。発掘資料と採集資料とでは主体をなすと考えられる土器型式が異なっており、地点および層序による時期の幅が予想されるのであるが、その位置づけは前期初頭から前半ということで大局的には符合している。結局つぐめのはな遺跡の営まれた時期については出土および採集の土器から大まかに前期前半を主体として一部中期が考えられることになる。

一方、発掘による石器の出土状況であるが、Ⅰ・Ⅱ層（縄文時代中期）からサヌカイト製の尖頭状石器、石鋸多量の不定形搔器が出土し、Ⅲ～Ⅶ層からは「サヌカイト製雙頭状の有舌尖頭器」四〇点の他、横型石匙、大形の鐵形石器などが出土しており、層位による石器組成の変化はほとんどみられないとの事であるが、詳細については土器同様不明と言わざるを得ない。ただ石器組成の全体的なあり方については採集・発掘資料ともに同様とみて大過ないであろう。採集資料で追加できるものとして、多量の石鏃、小形片刃の扁平磨製石斧、礫石錘などが挙げられる。発掘および採集の石器の多くは前期前半に比定され、一部中期のものが含まれると判断することが



第7図 つぐめのはな遺跡の土器 (縮尺約 $\frac{1}{4}$)

妥当であろう。

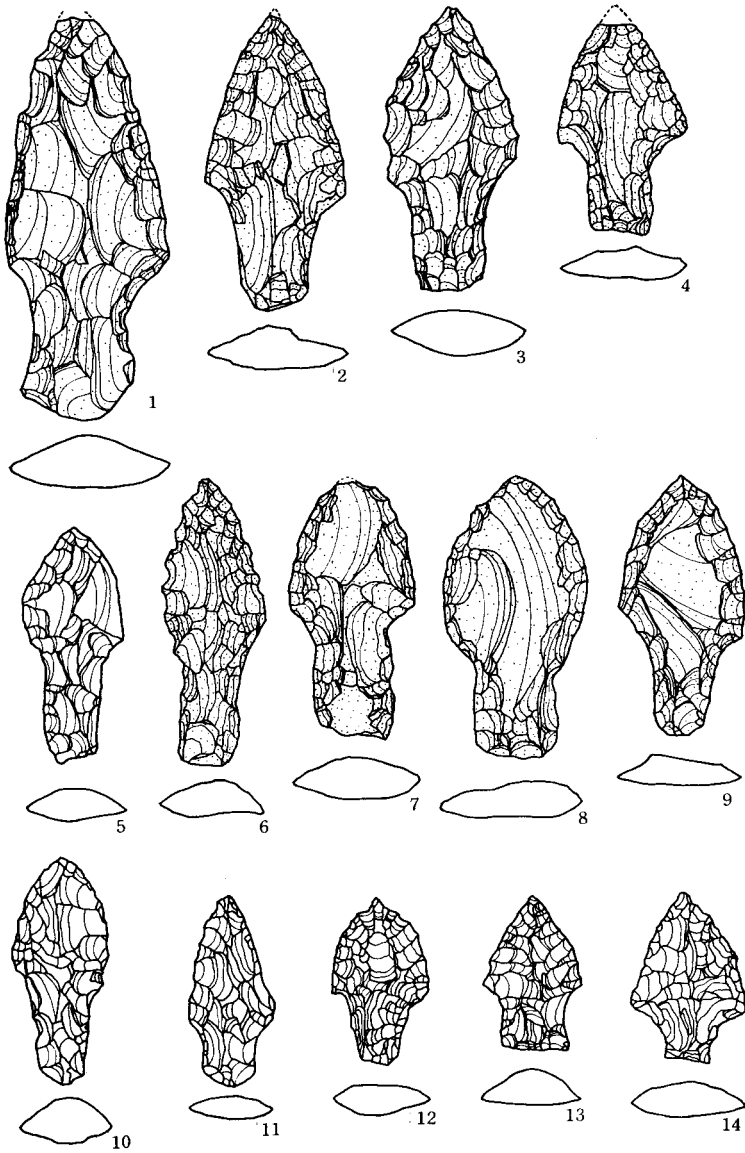
最後に自然遺物についてであるが、発掘によって多くのクジラ、イルカ類、サメ類などの海棲哺乳類骨および魚骨が出土しており、採集資料中にも一見してクジラと推定できる巨大な骨やその他の海棲哺乳類と思われる骨それにサメ歯などを認めることができる。

(二) 石銛

つぐめのはな遺跡ではこれまで述べてきた諸遺跡とは比較にならない程多量の石銛と考えられる石器が出土していることは既に記した通りであり、当遺跡の最大の特徴と言える。実際、発掘で六〇点以上、表採資料は一五〇点を越えていることから明らかである。以下代表的な資料について実測図にしたがって説明することにする。

第八図1〜9、つぐめのはな遺跡の典型的な石銛の資料であり、量的にも顕著な存在である。基本的な形態は鋭い三角形をした先端部とそれに続く両側辺の基部より肩を有し、さらに舌状の整った基部を形成している。

1は最も大形なもので、長さ、重量ともに他を逸脱している特異な存在である。一方5・9は小形のものであるが大多数のものと特別かけ離れた数値を示してはいない。尖頭状の刃部から肩にかけての側辺はほぼストレートに伸びるものとやや彎曲して脹らみを有するものとが見られる。また舌状の基部も長方形に近いものと末広がりを呈するもの、さらにその逆の細まるものなどのバリエーションが認められる。二次加工は側辺に沿って丹念に施されており、大半は素材のほぼ全面にまで剝離がおよんでいるが剝片の大剝離面ないし主要剝離面の一部を残すものも存在する。石材としては大多数がサヌカイト質の石で占められており、小形のものに限って黒耀石製（



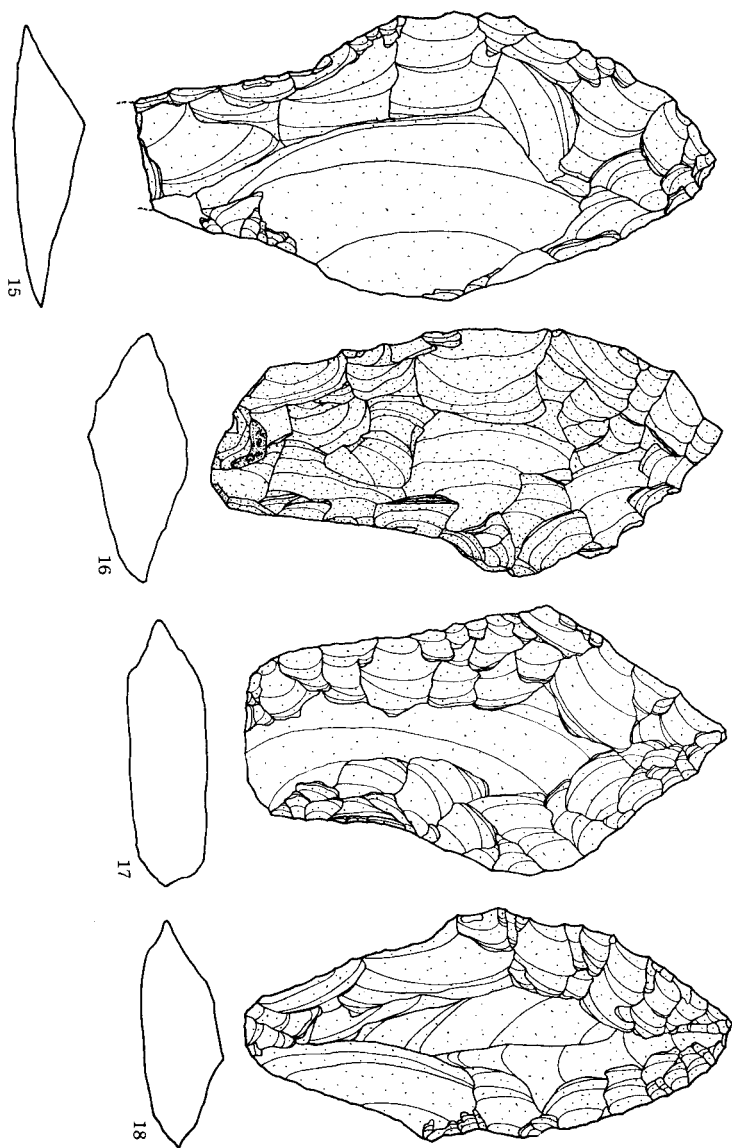
第8図 つぐぬのはな遺跡の石鋸(I)〔1～9 a1類, 10～14 a2類〕

縮尺 $\frac{1}{2}$

5)である。サヌカイト質の石器で大形のもは石銛に限らず他の石器も横剥ぎないしそれに類似の剥片が素材となっている。1〜9はつぐめのはな遺跡出土の一つのタイプを示めすものとして仮にa1類としておく。

第八図10〜14、三角形の尖頭部、両側辺の肩、さらに舌状の基部などの基本的な外形、側辺や基部のバリエーションなどa1類と全く共通するが、大きさ、重量それに石材の点で著しく相違する。すなわちa1類の小形のものよりさらにひとまわり小形で、重量ではさらにその開きが顕著に認められる。石材は黒耀石が圧倒的に多く用いられており、サヌカイト製のものは例外的な存在とみられる。大形のもとは小形のものとは石材の選択性が窺える。10〜14は大きさ、石材の違いを考慮してa1類と区別してa2類とする。

第九図15〜18、第一〇図19・20、石銛と考えた石器の中で極端に大形なものであり、15は特別大きく基部の一部を欠損していてなおかつ一六cmを測る。この他採集資料中には $\frac{1}{3}$ 程を欠損しているがさらに大形になると推定されるものも存在している。15〜20は形態的にバリエーションが見られるものの基本的な外觀として、大形で石器の最大幅が中央ないし先端部より位置し、一側辺あるいは両側辺に肩を形成し、あまり明瞭でない大きな舌状の基部を有していることなどが挙げられる。石材はサヌカイト質のものに限定されており、それも大形で厚味のある横剥ぎの剥片を用いている。二次加工は周辺に沿って集中的に行なわれ、中央部に素材の剝離面を一部残すものが一般的である。しかしながら16・19のように両面ともほぼ全面にわたって剝離が施され横断面が凸レンズ状のものも存在している。つぐめのはな遺跡採集の石銛の中にあつて、その数は一〇数点と必ずしも多くないが、大形である点を重視して15〜20の資料はb類として大別しておき、将来の資料の増加を待つて細分を試みたい。



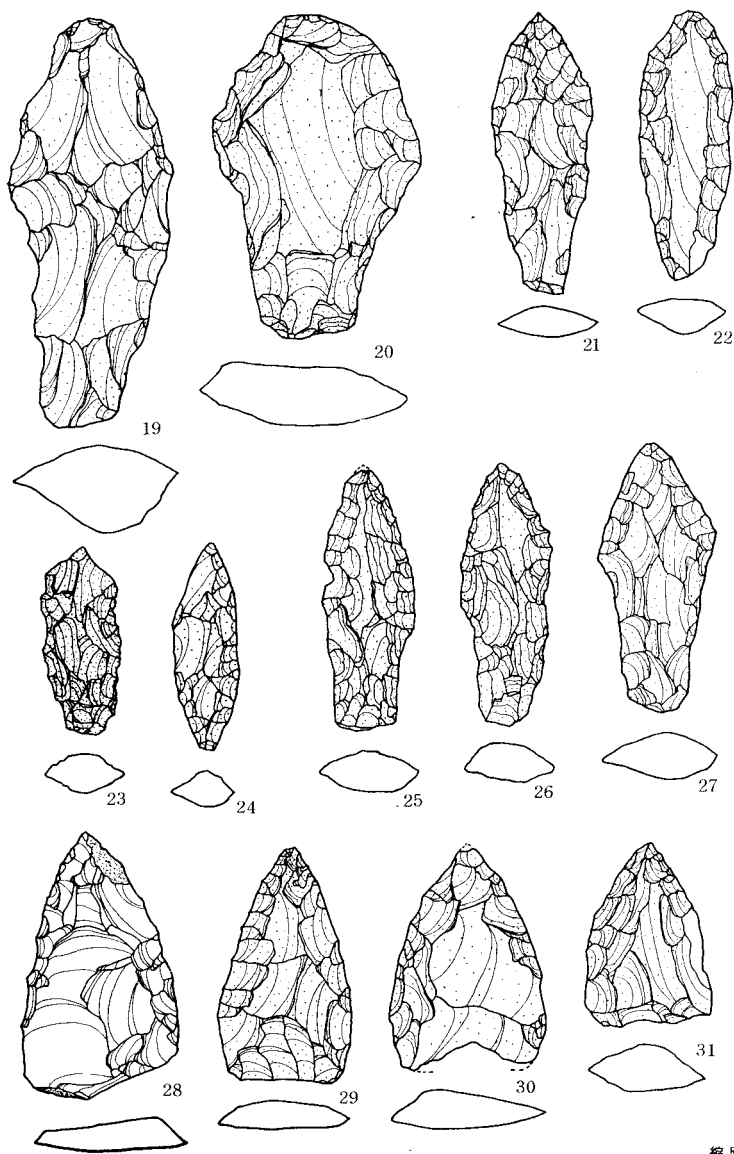
第9図 つぐめのはな遺跡の石鉢(Ⅱ)〔15~18 b類〕 縮尺 $\frac{1}{2}$

第一〇図21、27、いわゆる尖頭器として最も普遍的な形態を有している石器で、その数もa類に次ぐ量出土している。柳葉形を基本形とするがあまり顕著でない肩を有するものや舌状の基部と考えられるものを形成するもの、さらに木葉形に類似するものなど細部の形態は多種多様でその大きさ(長さ・幅)、重量にもかなりの幅が看取される。石材は小形のものの一部に黒耀石が用いられている他は全てサヌカイト質である。調整の剝離は周囲からほぼ全面にわたって両面ともに施されており、大半は凸レンズ状の横断面を呈している。これらの石器の用途については特に問題が残され、すべてが石銛として海の幸を対象としていたと判断できないであろうが、分類上石銛のc類として一括して扱っておきたい。

第一〇図28、31、ほぼ二等辺三角形をした比較的扁平な石器で、基部に抉りのない石鏃を大形化した形態を呈するものである。28のみ黒耀石製で残り三点はサヌカイト質の石材が使用されており、その加工は側辺部に集中して施される傾向が窺え、いわゆる半両面加工とされるものである。

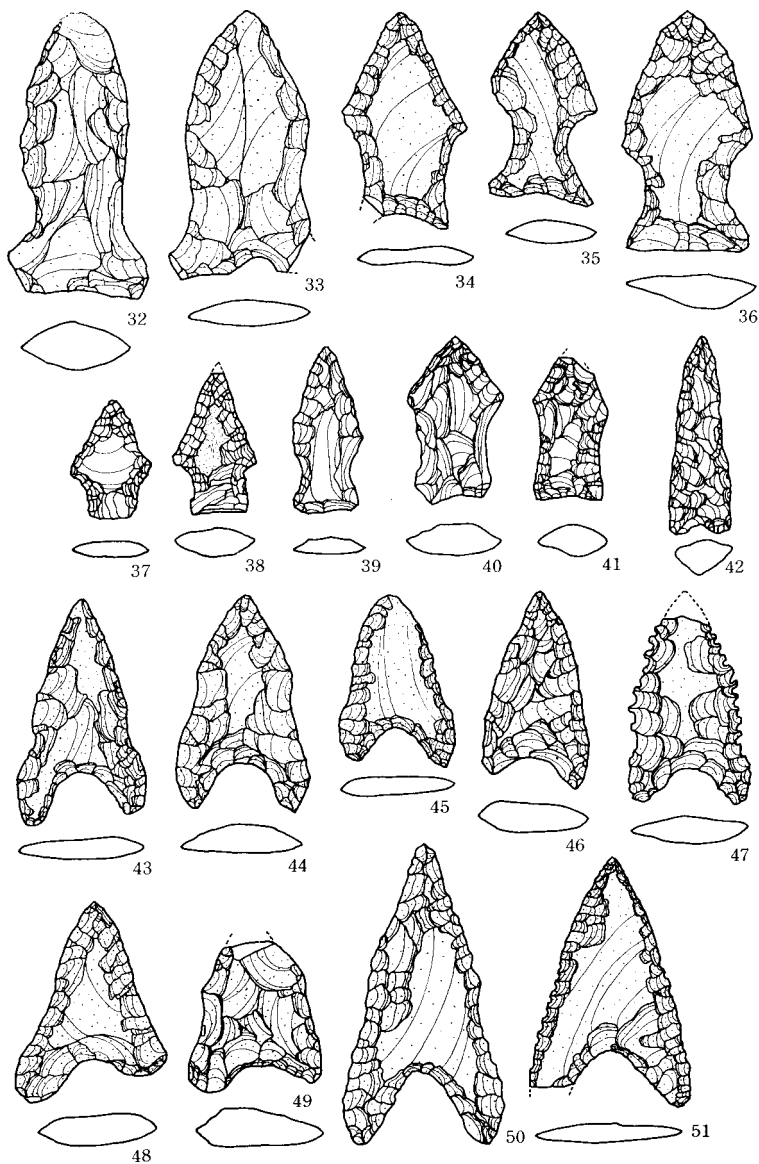
第一一図32、36、形態上それぞれに差異が認められるものの、三角形をした尖頭部と側辺の大きな彎入さらに角ばってしかも末広がりの基部に共通した特徴を抽出することができる。また素材にサヌカイト質の横剥ぎの剝片を用い二次加工が主として周辺部に限られることや扁平であることも一致している。つぐめのはな遺跡の石銛と考えられるものの中にあつて極めて特殊な形態を具備している石器とされる。

第一一図37、41、小形の尖頭状をした剝片石器で、三角形の鋭利な尖頭部、両側辺の抉入さらにほぼ四角形をした基部などに形態上の特徴が指摘できる一群である。石材は黒耀石でほぼ占められており、少量サヌカイト質製のものが見られる。加工は側辺部のみに集中しているものとほぼ全面におよぶものが存在する。



縮尺 $\frac{1}{2}$

第10図 つぐめのはな遺跡の石鋸(Ⅲ)〔19・20 b類, 21~27 c類, 28~31 d1類〕



第11図 つぐめのはな遺跡の石銛(N)〔32～36 d2類, 37～41 d3類, 42～51 e類〕 縮尺 $\frac{1}{2}$

28 ～ 41 については先に述べた a 類 ～ c 類とした石鋸と形態上および製作において著しく異なる石鋸と考えて d 類として分類し、さらに 28 ～ 31 は d 1 類、32 ～ 36 は d 2 類、37 ～ 41 は d 3 類と細別されよう。d 類として分類した石鋸の資料は二五点ほどみられる。

第一図 42 ～ 51、基部に抉入の加工が施されている鏃形の石器であり、その大きさおよび重量の点で縄文時代の各時期に普遍的に出土している石鏃とは区別され得るものと考ええる。実際つぐめのはな遺跡において石鋸を上回る数の石鏃が出土しており、それらの大きさは二 ～ 二・五 cm の大きさ（長さ）である。ちなみに多数の石鏃から無差別に抽出した五〇点の平均の重さは一・四一 g を測り、図示した鏃形の石器とは明瞭に異なっている。形態的には九州の縄文時代に普遍的な石鏃と極めて類似した外觀を備えていながらその大きさにおいて著しくかけ離れた石器を鏃形石器として分離し、石鋸の範疇で把握したい。基本の形態では基部に抉りのある石鏃の大形化したものであるが、細長い長身のものや側辺部が彎曲するもの、鋸歯状の加工が施されるものなど多彩な面をみせている。今後同様な資料の増加が予想されるだけにいずれ細分されるであろうがここでは石鋸の e 類として一括しておく。42 ～ 51 の資料中、42 のみ黒耀石製であり残りは全てサヌカイト質の横剥ぎないしそれに近い剝片を用いている。つぐめのはな遺跡採集資料の中に長軸の最大長が 3 cm を越え、重さで 4 g 以上の鏃形石器を二〇数点認めることができ、また発掘資料にも好例が見い出せ数量的には特異な存在とは考えられないであろう。

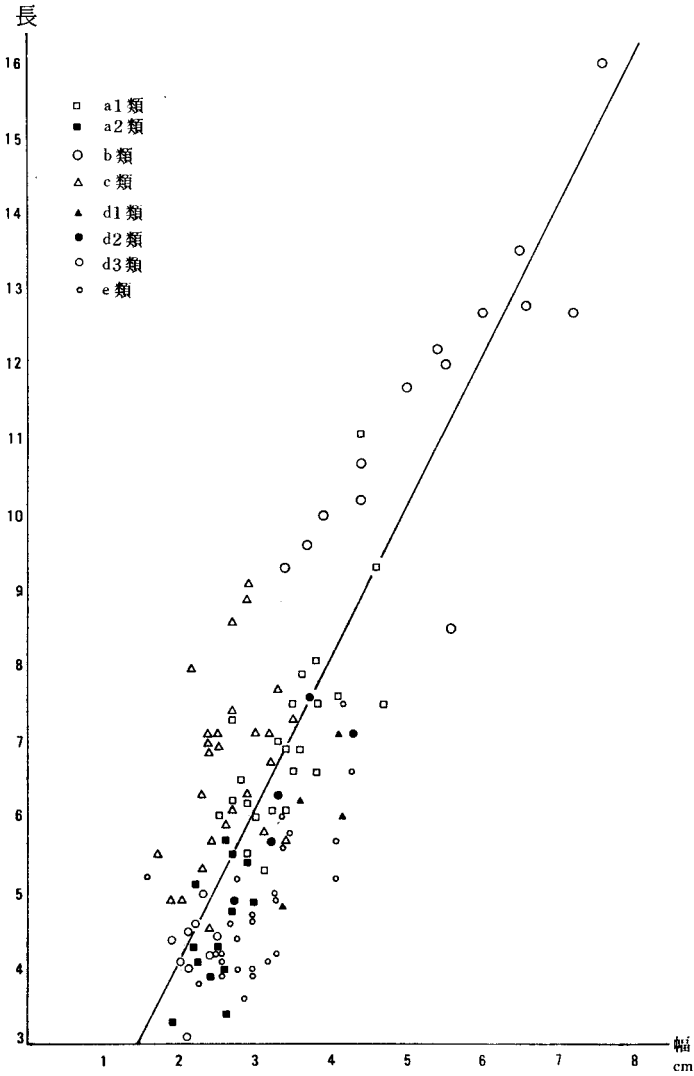
以上の図示した資料とさらに未掲載の資料を含めて、つぐめのはな遺跡出土の石鋸と考えられる石器を形態、大きさ、重さ、製作、それに石材などから要約することにする。

形態 先端部が鋭く尖ることではいずれも共通するが、側辺部に肩を有し舌状の基部が認められるもので中形

の a 1 類、小形の a 2 類、さらに大形の b 類がみられる。全体の形が柳葉形ないしそれに類似する c 類は尖頭状の石器の最も普遍的なものである。扁平で周辺部に加工が集中する半両面加工の d 類は二等辺三角形をした d 1 類、中形で側辺部に大きな袂入がみられ基部の末広がりの d 2 類、それに小形で a 2 類と d 2 類の両者に類似した形態を有する d 3 類に細分されよう。この他に石鏃と形態的に類似する大形の鏃形石器の e 類。形態の上からは以上のように大まかに分類することができる。

大きさ 第一二図は石銛と考えた尖頭状の石器の長さと同幅による分布を示したものである。ここで使用した資料は完形品を主体にして作成されたものであるが、先端部あるいは基部が極く僅か欠損しているものの、その推定が充分可能なものを一部含めている。

b 類が圧倒的に大きく a 1 類の最も大きい二点のみが b 類の最小のものと同じ大きさを示すだけであり、他とは明瞭に区別される大きさを示している。逆に最も小形の石銛は d 3 類で、長さでは三〜五 cm 内にすべておさまる幅も一・九〜二・五 cm で六 mm の範囲でおさえることができ、大きさでの斉一性が窺える。a 1 類と a 2 類は外觀では類似しているものの大きさの上で明瞭に区別される。この大きさの違いは対象物や使用法の上での差異を示唆していると考えることができよう。d 1 類と d 2 類ではほぼ同じ大きさを示しているが、長さと幅の比では d 2 類の方がより細長い形態を呈している。鏃形をした e 類は a 2・d 1・d 2・d 3 の各類および a 1 類の半数近くの分布圏と一致しており、大きさの上で他の石銛と符合している点は注目される。最後に c 類であるが最大九・二 cm、最小四・五 cm と長さにおいて約二倍の開きがあり、長さと幅の比では幅一に対して長さが二・五を中心としたその前後に集中する傾向が窺え、他の石銛との形態上の相違が長さと幅の比に明瞭に認められる。



第12図 つぐめのはな遺跡出土の石鈿の大きさ(長幅)

最大長 (cm) 類	3.0~5.0	5.1~9.0	9.1~
a1	1	19	1
a2	15	0	0
b	0	0	12
c	6	17	1
d1	0	4	0
d2	2	2	1
d3	10	0	0
e	18	9	0

表2 分類別の大きさ(長さ)による資料数
(つぐめのはな遺跡)

長さと同幅の分布図を概観すると、長さにおいて9cm前後で間隙がみられ、さらに5cm前後においても若干のバラツキが窺え、試みに9cmと5cmを基準にして資料の数を表わしたものが表二である。これによると分類別でかなり明確に長さによる違いが求められるようである。

重量 大きさ(長さ)を一つの基礎にして行なった分類を第一三図の重さの上で検討してみた結果、長さ以上に明瞭な区別が認められるのである。

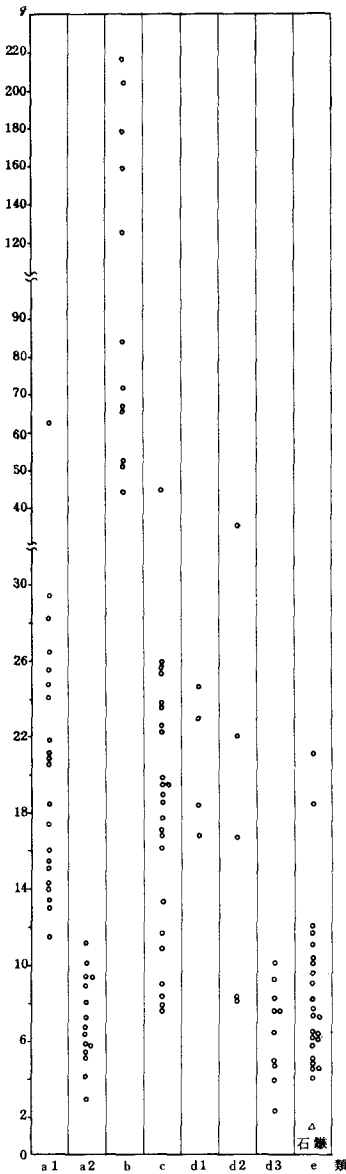
最大はやはりb類でありとりわけ15は基部の一部を欠損しているもののそれでいて二一六gあり、最少はd3類、a2類の二・二g、二・八gである。この両者の最大はそれぞれ一gと一〇gであり、全体的に極めて共

通した重さが認められる。a1類は六二gの特別大きなものを除くと他は二九・三〜一三・四g内におさまり、形態的には類似しているa2類との相違が重さの上で明確に把握され、a1類とa2類を分離する際の根拠の一つとされる。d1類の四点は一六・七g〜二四・七gとかなり近似した数値におさまっている。d2類の重さが測れる資料は五点だけであるが、八・一g、八・二gの軽量のもの、一六・八g、二二・〇gの中間のもの、さらに三五・四gのものと同バラツキが見られる。この中でd2類の中間のものはa1類の大多数と一致する重さを示している。c類は

七・六g〜二五・八gであり長さの開きに比較すると重さの上ではややまとまっていると見なすことができよう。e類は最小四g〜最大二二・九gであり、大きな二点を除けば四g〜一二g内の重さとなり、a2類、d3類と全く共通している。いずれにしても鋸形をしたe類の重量は一般の石鋸のそれに比較して二倍から八倍の重さの開きが認められ石鋸とは使用法なり対象物なりの面で区別して考察される可能性が示唆されている。

以上、重さの上においても各石鋸間でかなり明瞭に差異が求められ、各類における集中性や一定の傾向を読み取ることが可能であり、石鋸の分類上での蓋然性が高まるものと考えられよう。なお表三は分布図で比較的まばらな箇所を一つの目安にして一二gと三〇gで区別した資料の数である。

製作 当遺跡出土の石鋸と判断される石器の加工の上では、(I)石器の表裏共ほぼ全面に加工が施されるもの、(II)周辺のみ加工が集中し主要剥離面や大剥離面を中央近くに残すもの、(III)主として片面にのみ加工が認められ



第13図 石鋸の分類別の重さ分布図
 (つぐめのはな遺跡)

るもの、に三大別することができる。しかもそれらは石銛の各類によってほぼ一定の傾向が抽出できるものと考
える。すなわち a 1 類、a 2 類それに c 類は (I)、b 類と d 2 類は (II)、さらに d 1 類は (III)、d 3 類および e 類
は特定の傾向がみられず (I) ~ (III) となる。

素材の剥片については概して大形 ~ 中形のものではサヌカイト質の横剥ぎないしそれに近い剥片がほぼ共通し
て用いられている。この傾向は石銛に限らず、つぐめのはな遺跡で多数出土しているスクレイパー類についても
指摘でき当遺跡における基本的な剥片剥離技術としてサヌカイト質の石を素材とした横剥ぎの技法が存在してい
ると判断されよう。b 類の石銛は大形でしかもある程度の厚味を有する扁平な剥片剥離技術があつてはじめて製

重さ 類 (g)	2.0~1 2.0	1 2.1~3 0.0	3 5.1~
a 1	1	19	1
a 2	15	0	0
b	0	0	12
c	6	17	1
d 1	0	4	0
d 2	2	2	1
d 3	10	0	0
e	21	2	0

表 3 分類別の重さによる資料数
(つぐめのはな遺跡)

作しうるものと考えられるのである。県の発掘資料
中の横剥ぎの石核はまさにこれを裏付けるものと言
える。また石銛の大きさや形態それに重さなどの上
である共通性が抽出できるのは素材とされた多量の
剥片の剥離技術の斉一性と無関係とは思われない。

石材 つぐめのはな遺跡出土の石器の大半はサヌ
カイト質の石で占められており、比較的小形の石銛
および石鏃に黒耀石が用いられており、石器の大き
さの上に石材の選択が如実に反映されている。剥片
石器に限って言えばサヌカイト質の石と黒耀石以外

の石材は皆無に近い状態である。

サヌカイトは古銅輝石安山岩の細粒、硝子質の岩石を指しているようであり、肉眼的な観察で近似するものとして安山岩や玄武岩と呼称されているものの一部が存在しており、当遺跡の石材がいずれに相当するか不明なためサヌカイト質の石という記載に努めたのである。西北部九州においてサヌカイト質の岩石を産する地域は多く見受けられ、多久・小城地方の鬼鼻山をはじめ北松浦半島の玄武岩溶岩地帯や大村湾東部等においてである。³⁸ つぐめのはな遺跡では多量にしかも大きな剝片石器が存在していることを考慮すると距離的にも近い北松浦半島の玄武岩の溶岩台地にその原産地が求められるであろうが推定の域を出ない。

一方黒耀石(岩)については、(1)黒色、漆黒色でガラス光沢が強く透明・半透明なものが顕著であるが、それと共に(2)灰色、灰黒色で光沢が弱く半透明・不透明なものも相当数認められる。これら二者のものと異なる特徴を有するものも僅かであるが散在している。黒耀石はサヌカイト質の石と同様あるいはそれ以上に西北九州に集中しており、最も著名な伊万里市の腰岳、松浦市の星鹿半島、佐世保市の周辺、それに彦岐の印通寺などが知られている。³⁹ 当遺跡で使用されている黒耀石の原産地もしくは原石地がいずれかについて判断する科学的なデータは不明である。ただ断口および自然面の肉眼的観察によっておおその推定は可能と思われる。(1)の黒耀石の特徴と類似するものでは腰岳産と星鹿半島それに印通寺産などが挙げられるであろう。仮にこれらの中で考えとすれば距離的な面と黒耀石製の石器、石片の大きさそれに礫面の外形から判断すれば星鹿半島産の可能性がでてくるであろう。(2)についてはその特徴的な色調からまた海岸近くにおいても採集できることなどを考慮して、佐世保市の東浜および淀姫が推測され得るであろう。

サヌカイト質の石にしても黒耀石にしてもその原産地や原石地の推定は岩石の科学的分析による同定を待たなければならぬ事は言うまでもなく、同時にそれ以外のあらゆる考古学的なデータ、分析を加味して行なわれなければならぬ今後の問題点の一つとされる。

四、石銛に関する考察

西北九州を中心に九州の西海岸の諸遺跡において断片的に知られている資料およびつぐめのはな遺跡出土の資料について述べてきた。これらの石銛と考えられる資料をもとに、石銛の分類、時期、分布それに石銛による捕獲対象物、使用法などについての若干の考察と問題点を挙げることにする。

(一) 分類

石銛と推定される石器の形態的特徴についてはつぐめのはな遺跡の資料を a 1 類と e 類までの 8 類に分類した。しかしつぐめのはな遺跡において全く認められないものが存在するので、つぐめのはな遺跡の資料を基礎にして、これまでに知られている石銛と考えられる石器の分類をまず行うこととする。

A 一類 ほぼ三角形をした鋭い先端部と、側辺の基部より肩を有しさらに舌状の基部へと移行する形態を基本とするものである。その最大長は五〜九 cm に集中し、重さでは一二〜三〇 g 内におさまる大きさである。石材はサヌカイト質のもので占められており、加工は両面ともほぼ全面におよぶものが大半であるが周辺部に集中するものもみられる。つぐめのはな遺跡の a 1 類がこれに相当し、他に鐘ヶ崎貝塚（第二図 1〜3）、山鹿貝塚（第

三図8・10)、鳴山池遺跡(第三図15)、船瀬遺跡(第三図16)、沖ノ島社務所前遺跡(図版1・2)出土の資料を含めることができる。舌状の基部をはじめ全体的な形態、細部の加工等ではかなりの違いが認められるのでさらに検討を加える必要がある。

A 二類 基本的な形態は先のA一類と共通するが全体により小形で長さは三・五・五cm、重さは二・四〜一〇・五gと軽量である。黒耀石製が圧倒的に多くしかも大部分は両面ともに丹念な二次加工が施されている。つぐめのはな遺跡のa2類以外には現在の所類例を聞かない。

B 類 極めて大形な石鋸の一群で形態にはかなりのバリエーションが見られる。素材には大形でしかもある程度の厚味のある扁平なサヌカイト質の剥片が使用されている。つぐめのはな遺跡のb類に代表されるが、下本山岩陰遺跡(第一八図1)、西市来貝塚(第四図23)、苅岐の弁天崎遺跡においても好例が知られている。この他九州の西海岸のいくつかの遺跡において打製石斧とされている資料中に刃部が尖り気味のものが見られ、これらについても検討する必要がある。

C 類 柳葉形に近い形態を基本とするものであり、形態上からはこれらを直ちに石鋸とするのは多くの問題が残るであろう。これとは逆の面で、西北九州の海岸部や島に立地する縄文時代の遺跡出土の資料で石槍とされている石器の中で石鋸とされるものが含まれる可能性を示唆していると言えよう。

D 一類 ほぼ二等辺三角形を呈し基部が直線をなすもので、大きさに比較して扁平である点の特徴とされる。つぐめのはな遺跡のd1類や崎瀬遺跡(第四図18)、西之園遺跡(第四図22)をこれに含めることができよう。

D 二類 三角形をした尖頭部とそれに続く大きな彎曲を呈する側辺、両側に向って開く基部に形態上の特色が

みられる。今のところつぐめのはな遺跡のd2類のみしか知られていない様である。

D 三類 全体の形はD二類に共通する要素を抽出できるが、極めて小形である点を重視して分離することにした一群である。特にその使用法については組合せ銛の一部として用いられる可能性が強く看取される。他遺跡での出土例を知らないののでつぐめのはな遺跡のd3類を代表としておく。

E 類 基部に抉りのある石鏃の大形なもので、石鏃とはその大きさの違いが最大長にあらわれ、その重さについてさらに顕著な相異が指摘できる。形態上では細長いもの、側辺に浅い抉入や肩を有するもの、さらに鋸歯状のものなどバリエーションがみられる。つぐめのはな遺跡のe類、西之園遺跡(第四図20・21)などをはじめ、西北九州の諸遺跡で断片的な資料が知られているようであり、今後E類の資料は増加するものと考えられる。

F 類はつぐめのはな遺跡の一五〇点を越える資料中に一点も見い出すことができないものであるが、かつて深掘遺跡の調査で一躍注目された鋸歯状の側辺を有する特異な形態の一群をF類として一括する。基本の形態としては三角形ないし長三角形をして基部が直線もしくはゆるやかな彎曲を呈している。大きさでは最大長が三・五cmと六cmにほぼおさまる大きさを示し、先に述べたA二類、D三類それにE類とほぼ等しい数値が認められ、具体的に小形でしかも扁平である点が強調される。側辺部の形態によって他の石銛と区別したF類は細部にわたれば極めて多彩な様子が窺える。しかしながら出土例が限られているためここでは大別して考えておきたい。

F 一類 西北九州の海岸部の遺跡で出土する特異な形態の石器として古くから注目されている「石鋸」と類似する鋸歯状の側辺を有する一群である。最大長については既に述べた様にA二類、D三類、E類と近似しているが、長さとの比ではA二類、D三類の二・一と異なり、一・五・一に集中する傾向が窺え、鏃形石器のE類に

より近い数値が求められる。深掘遺跡（第二図 6・7）、天神山貝塚（第三図 11）、里田原遺跡（第三図 12）、赤松海岸遺跡（第三図 13）に好例が知られている。その他、榎坂貝塚、沖ノ原貝塚等においても出土しており、数的にも石鋸のひとつのタイプをなすものとして把握される。石質はサヌカイト質製のものと同礫石のものとが認められる。

F 二類 全体の形は F 一類に準ずるが、側辺の形態は小さな鋸歯状を呈さず大きな抉りを有して波うっている点で区別され、同時に基部が浅くしかも大きな彎曲を形成していることも一つの特徴とされよう。前に述べた D 二類と類似した点が観察される。細部の形態上ではそれぞれ異なり将来当然分離されるものと予測されるが類例が少ないことを考慮して以下の資料を一括して F 二類としておく。有喜貝塚（図版一 1）、沖ノ原貝塚（第三図 14）、越高遺跡（第四図 19）出土のものであり、五島女亀遺跡においても類似したものが採集されている。

この他、韓国南部の東三洞貝塚（第四図 25）迎日灣外海底（第四図 26）の資料も鋸歯状の側辺を有する F 類の石鋸として考えることができよう。

さらに享保年間に土佐沖で捕獲した鯨から発見された石鋸（第一六図 1）と（第一四図 2）は A 一類と c 類とにそれぞれ対比され得るであろう。また大阪府国府遺跡（第四図 24）採集資料中に F 二類と考えられる石器が報告されている。

以上、現在知られている石鋸と推定される石器は A 一類より F 二類まで一〇のタイプに分類され得ると考えますが、つぐめのはな遺跡以外は極めて断片的であるため今後資料の増加を待ってさらに検討される必要がある。

(二) 時期

石銛と考えられる石器の時期の決定は他の石器類と同様、相伴土器によらざるを得ないわけであるが、确实なある限られた時期の判明するものや出土状況からある幅をもって考えなくてはならないもの、さらに全く不明なものもある。

まず確実な時期がおさえられるものとして、後期前葉の天神山貝塚、後期中葉の深堀遺跡、榎坂貝塚、前期前葉の越高遺跡などを挙げることができる。それに後期中葉として鐘ヶ崎貝塚、西市来貝塚、弥生時代中期の里田原貝塚などをつけ加えることができよう。

次に时期的な幅を有するものとして、前期前半に主体が置かれながらも中期までの幅を一応考えなければならぬであろう。つぐめのはな遺跡、同様に前期・中期の沖ノ島社務所前遺跡、前期・後期の下本山岩陰遺跡、中期から後期にかけての沖ノ原貝塚、有喜貝塚、山鹿貝塚、それに前期・後期の西之蘭遺跡などが存在する。女亀遺跡、弁天崎遺跡は採集された土器から中期の可能性が窺える。

以上の諸遺跡の状況から西北九州を中心に九州西海岸における石銛と考えられる石器は縄文時代前期前葉から後期にわたる長い期間にわたって認められることになる。現在までのところ早期および晩期における存在を積極的に裏づける資料は皆無の状況であるが、里田原遺跡の弥生時代中期の例からすれば今後晩期の遺跡においても出土する可能性の一端が示唆されている。

先に分類を試みたタイプ別と時期の関連についてを究明するにはそれに耐え得る資料が余りにも少ないのであるが、予察として触れることにする。

A一類からE類までの八つのタイプは前期を主体に中期までの幅が考えられるつぐめのはな遺跡において確実に認められる。ところが比較的小形で鋸齒状の側辺を有するF一類、F二類は全く出土していないのである。ところがこの両者は中期と後期に集中して出土する傾向がみられ、特に中期の阿高式土器、後期の磨消縄文土器に主として共伴する石鋸と考えられよう。古くから注目されている石鋸の時期とも符合し、両者の関係がより身近なものとして把握されることになろう。

一方、A一類については細部にわたる形態上の変化を有しながらも側辺に肩をもち舌状の基部が形成されている点で共通しており、時期的にも前期・中期・後期と普遍的に認められる一群である。同様にC類についても、その用途の認定には困難さがつきまとうものの時期的には息の長い存在とされる。さらにE類は現在のところ類例が乏しいのであるがこれまでの資料を再検討することによって増加するものと考えられ、時期的にも前期から後期の長い期間にわたって使用された石器であろう。D類は数が少なくしかも出土遺跡が限られているため明確にし得ないが、つぐめのはな遺跡や西之園遺跡の例から前期の可能性が予想され、中・後期における確実な出土例を聞かないのである。一方、このD類とF類とは形態上にいくつかの共通性が指摘され、さらに両者の時期のあり方から、D類↓F類という系統的な推移が予想されるであろう。最後に大形の石鋸と考えられるB類であるが、全体的に粗雑なつくりのものが多く他の石鋸に比較すると目立たない存在であることもあって今のところ類例に乏しい。また大形で不整形のスクレイパー類や打製石斧、それに粗雑な尖頭器との混同も考えられるであろう。この様なことも加わって時期について明確にし得ないが、前期から後期までの期間にわたるものと考えられる。

(三) 分布

実見したが未発表のため図示できなかつた、あるいは実見する機会が持てなかつたものを含めて、現在までに西北九州の海岸部を中心に二ヶ所の遺跡が知られており、その数から言つて必ずしも特殊な存在とは見なされないのであろう。第一図はそれらの遺跡の分布図である。

響灘・玄海灘に面する九州本土の北海岸、五島灘を挟んで対峙する西海岸および五島列島、天草灘から南九州の西側海岸部、さらに北の沖ノ島から対馬を介して韓国南部の海岸にその分布が認められるのである。図示された様にいずれも岩礁が発達した内湾から外洋に向かつて海岸部に遺跡が集中するという一つの基本的な共通した立地が見い出せる。海岸部に立地するという共通性は石鈿とされた石器の用途を推定する上で極めて重要な要素とされる。

九州の西海岸は奄美大島の北西沖合で黒潮主流から分離した暖流が九州西方を北上し、五島列島西沖から対馬海峡を経て日本海へ流れ込んでいるのである。石鈿が出土している遺跡はまさにこの対馬暖流の流路にあたる海域に面して広がっているのである。この事実は石鈿出土の遺跡の立地と同様、この石器の用途や対象物を想定する上で大きな示唆を与えてくれるものである。

対馬海峡を挟んで対峙する韓国南部の東三洞貝塚やさらに北の東海岸の迎日湾外海底から採集された石鈿と考えられる資料は遺跡分布の上でも貴重な存在と言える。さらに九州本土の南への拡がりを示唆する遺跡として西市来貝塚と薩摩半島西海岸の西之園遺跡がある。一方、大阪府国府遺跡において採集された「アメリカ式石鏃」は石鈿のF二類に極めて類似しているもののこれを直ちに石鈿とするにはいろんな面で問題が残るであろうが興味の

ある資料である。

(四) 対象物

石鋸の使用による捕獲対象物については当然石鋸の使用法と関連して検討されなければならない問題であるがここでは遺跡の立地およびその環境、遺跡出土の自然遺物ならびにその関連資料、さらに鋸による捕獲が予想される対象物の生態などから捕獲の対象となり得るものを探ってみたい。

石鋸と考える石器の基本的な形態から山野における獣類の捕獲にも充分その目的をはたせるであろうし、その一部は実際その様に使われた可能性も残されるであろう。しかしながら既に述べたように石鋸を出土する遺跡のすべてが海岸部に集中しており、しかも岩礁の発達した内湾あるいは外洋に面している事からみて捕獲対象物の大半を海に求める事にまず異論はないであろう。その様なわけで特に海の対象物に焦点をあてることにする。

西北九州の岩礁性の海岸に生棲する魚類としてはメジナ、マダイ、スズキ、ハタ類などが挙げられ、一方沿岸から外洋にかけてはブリ、サメ類、マグロ、バショウカジキなど大型の魚類が見られる。特にこれらは浮魚と呼ばれており、遊泳層が比較的浅くて表層性あるいは表中層性とされている。また成長段階や水温、時期、時間帯などの複雑な条件のもとに沿岸近くに接近したり、あるいは海水面ないしそれに近い深さを遊泳する生態が知られている。⁴⁾

一方海棲哺乳類では鯨類がその代表とされ、特にナガスクジラは対馬暖流に沿って西九州の海域を回遊しながら北上しており、日本近海の捕鯨漁場の一つとして五島列島の西海岸が挙げられている程である。またイルカ類

(科)についてもやはり西北九州の海岸において多く見られ、現在も五島、壱岐においてイルカ類の大量捕獲が行なわれている。さらに鯖脚類のアシカは近年日本の沿岸においてほとんど認められないとの事であるが、古くは伊豆神津島に多棲し、日本海竹島は最近まで繁殖地として知られている他、四国、九州においても記録されており、西北九州沿岸の海棲哺乳類と見なすことができよう。⁴³

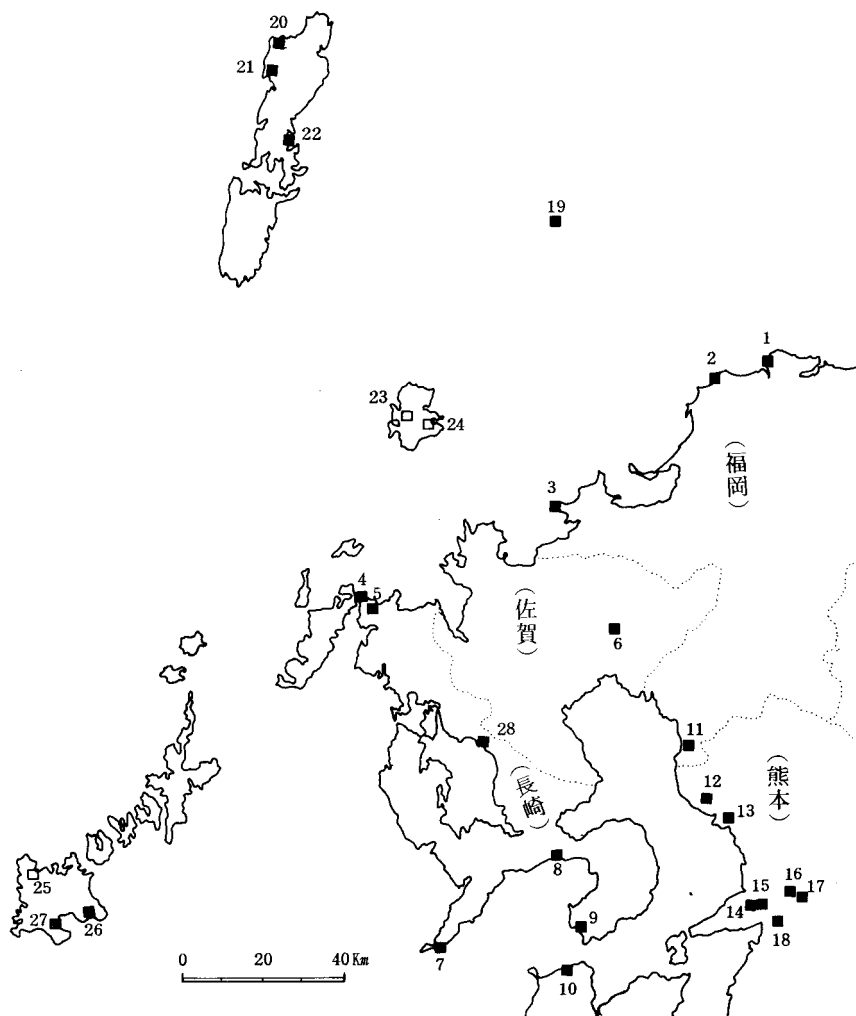
次に西北九州の海岸部の縄文時代の遺跡で大型魚類の骨や海棲哺乳類の骨が出土している、もしくは間接的にそれらの存在が示されている一例へば海棲哺乳類の椎骨のスタンプが認められる土器の底部やサメ歯の加工品など遺跡は二〇数ヶ所を数えることができ、第一四図はそれらの遺跡の分布図である(表四)。分布の全体的な傾向として、外洋に面した遺跡と有明海の沿岸部とに大きく二分され、特に後者の貝塚では土器底部のスタンプの出土が顕著でしかも中期の時期に集中する傾向が認められる。一方前者の遺跡の大半は先に述べた通り石銛と考えられる石器、それに石鋸が出土しており、石銛と対象物の関係を暗示している。

自然遺物の種類ではサメ類、クジラ類が多く、それに次いでイルカ類、タイ類で、他にアシカ、エイなどが見られる。ブリ、スズキは少なく、マグロ、バシヨウカジキなどについては現在までのところ確実な出土例を聞かない。海棲哺乳類椎骨の土器底部のスタンプも相当数見られる。

これらの資料が出土している遺跡において、すべてが意識的に捕獲されたものとの判断は直ちに下せないであろうし、またその捕獲が石銛を用いた刺突によるものとの結論はさらに困難であろう。なぜならば特に鯨類は自然に海岸へ流れついた「寄せ鯨」や沖合を漂流するものを岸へ引きつける「流れ鯨」の存在が当然予測され、さらにイルカ類などでは他の大形の魚類に追われて、あるいは索餌により海岸や内湾の浅瀬へ上がる事もよく知ら

	遺跡名	時期	クジラ類の骨製品土器任意	イルカ	アシカ	サメ骨サメ歯	エイ	ブリ	結合式釣針	離頭鈎	石鈎	石鈎	註番号
1	山鹿	縄前~後				○					○	○	4
2	観ヶ崎	縄後				○						○	14
3	天神山	縄後	○			○	○				○	○	8
4	つぐめのはな	縄前・中	○	○		○					○	○	7
5	里田原	弥中	○	○		○							19
6	竜王	縄中	○										57
7	臨峯	縄後				○			○	○	○	○	29
8	有壽	縄中~後	○									○	13
9	永瀬	縄後		○		○							58
10	沖ノ原	縄中~後	○	○					○	○	○	○	21
11	荒田比	縄中	○				○						59
12	古閑原	縄中	○										60
13	尾田	縄前~後				○	○				○		61
14	西岡台	縄前~後				○	○						51
15	轟	縄前・中	○										43
16	御領	縄後	○										62
17	向高	縄中	○				○						44・63
18	大野	縄中	○										64
19	沖ノ島	縄前~晩			○							○	6
20	越高	縄早・前	○									○	26
21	志多留	縄後	○	○	○	○			○	○	○		64
22	住吉平	縄晩				○							66
23	カラカミ	弥中~後	○							○			50
24	原ノ辻	弥中	○		○	○							67
25	三井兼	弥中		○		○	○	○					88
26	江胡	縄前	○										69
27	宮下	縄後				○			○	○	○		70
28	下本山	縄前~後				○	○		○			○	25

表4 海棲哺乳類・魚類などの出土遺跡と漁撈具出土一覧



第14図 海棲哺乳類・底部厩痕・魚類など出土遺跡分布図
(■縄文 □弥生)

45 れている通りである。また捕獲の方法についてもアシカなどでは繁殖地においての撲殺も考えられ、タイ、ブリ、スズキなどは釣による捕獲も当然推察できるのである。以上の事を考慮してなおかつ海棲哺乳類や大形魚類などの刺突漁法による捕獲の可能性は残されているものと考ええる。

千葉県稲原貝塚出土のイルカの肢骨に射こまれた黒耀石製鈎先の発見は周知されている注目すべし例である。⁴⁶ 先端の尖った黒耀石製の剥片にあまり加工を加えずに鈎先として用いられており、ちなみにその大きさ（最大長）は六・二cmである。この鈎先が柄とどの様に着装されていたのか、またどの様な用いられ方をしたかについては知るすべがないわけであるが、鈎による捕獲対象物の一つとしてイルカが明確に示されている。同時にそれに用いられた石器が特別鋭利に加工されていない事も大いに注意すべき実例である。



第15図 捕鯨図（老岐鬼屋ノ久保古墳壁画）

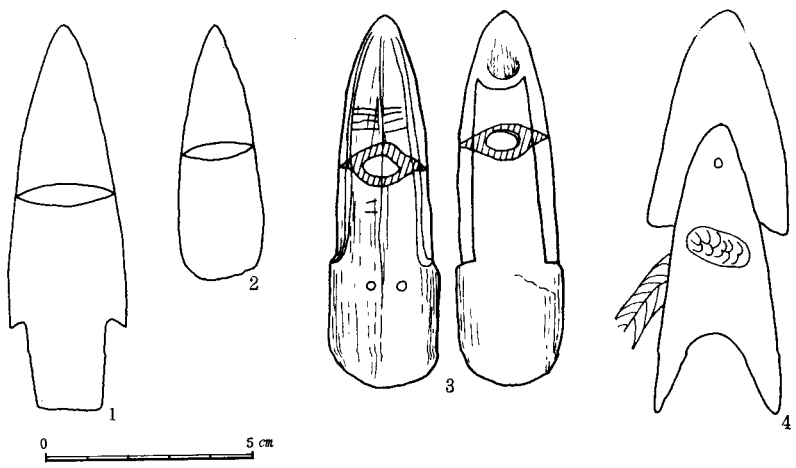
西北九州においてはこのような様な海棲哺乳類の骨に射込まれた状態での出土例を聞かないが、長崎県老岐の鬼屋ノ久保古墳の横穴式石室に線刻された捕鯨図（第一五図）は少くとも古墳時代において西北九州の海で鯨の捕獲が鈎によって行なわれていた事を端的に示す好例とされる。⁴⁷ この図柄では複数の舟と共に背中に鈎をつきたてられた鯨が描かれ、しかも子鯨と一緒に描かれている。西北九州の沿岸を回遊する鯨を見かける時はほとんどの場合子づれであると云う平戸瀬戸の古老の話と符合し、この図の写実性がくしくも証明されていると見なすことができる。

次に縄文時代とは時間的な隔たりはあるものの、「万葉集」や「老岐風

土記」の中にクジラについての記載が認められ、特に「イサナ取（鯨魚取）」として海や海洋の枕詞として用いられており、クジラと人間との深い係わりを窺うことができる。また同じ「万葉集」の中で能登の沖合で「鯨衝く」と歌われているのがみえ、日本海の沿岸でマグロを対象とした突き漁法の存在を知るのである。⁴⁸

石銛を用いた捕獲対象物の主要なものと推定されるクジラ類については次の具体的な例からその可能性が充分強められるであろう。第一六図は享保年間に土佐沖で捕獲した鯨の皮より発見された各種の銛である。この図は昭和一三年喜田貞吉氏が高知城内の懷徳館に展示されていた資料をスケッチしたもので名取武光氏によって紹介されている。⁴⁹

第一六図 1 はスレート製の磨製の石器で全体的に細身の作りを示し、基部よりの両側辺に鋭い肩を有し長方形の舌状の基部が見られる。石質、製作法は異なるがその外觀は A 一類に符合し、大きさでも $9 \cdot 1 \text{ cm} \times 2 \cdot 9 \text{ cm}$ と類似した値が求められる。2 は黒耀石製のほぼ柳葉形の外觀を呈しており、打製によるものと判断でき、c 類として分類したものとまさに軌を一にするもので、大きさは $6 \cdot 1 \text{ cm} \times 2 \cdot 1 \text{ cm}$ である。3 はアイヌのキテ（回転式離頭銛）であり、4 は骨製の彫刻のある銛である。いずれも北海道ないしさらに北の地方において、海棲哺乳類の捕獲に使用されているものの様である。以上四点の銛の資料は享保年間にそれぞれ別個の鯨より発見されたもので、享保年間に遠からぬ時期に鯨の体内に射込まれたものと考えられる。3・4 については銛の特徴から北の海においてであろうが、1・2 については鯨が広く回遊する事から考えれば射込まれた地域については決定し難いであろう。いずれにしろ六〜九 cm 前後の石製の銛がいくつかの海において鯨を対象に用いられていた事を知り、石銛の一つの対象を鯨に求めることができる貴重な資料である。



第16図 享保年間土佐沖で捕獲した鯨より発見された鈷

(五) 着装と使用法

石鈷と考えられる石器がクジラ類をはじめとする海棲哺乳類や大形魚類を対象とした刺突のための漁撈具である可能性を述べてきた。その使用法については全く推定の域を出ないわけであるがいくつかの推察を行なってみたい。

まず予想される対象物である海棲哺乳類や大形魚類の生態からすると、柄を持ったまま獲物に突き刺す使用法は考え難く、むしろ対象物に投げつけることによってその目的を果たす道具、いわゆる鈷としての使用法が考えられなくてはならないだろう。次に問題となる石鈷と中柄もしくは柄との関係、すなわち柄と鈷先が離脱するか固定されているかということになるわけだが、これについて明確な判断を下し得ないが、石鈷の大きさ、形態等から若干の考察を行なってみよう。

石鈷と中柄あるいは柄が固定されているにせよ、

離脱するように装置されているにしろ、中柄もしくは柄の大きさは石銚の大きさに特に石銚の基部の幅と長さに規定されることは当然である。そこで石銚の基部の大きさ（特に幅）およびその状態から柄・中柄の大きさを考えた。
い。

A 一類の整った形を有する舌状の基部は明らかに柄（中柄を含む、以下同様）の着装を意図して形成されたものであり、その基部につながる張り出した両肩はかえしの役目をもつものである。ただ両肩は鋭角な状態でないためかえしとしての効力に疑問は残る。A 一類の基部の幅は、一・七 cm ～ 三 cm を測り、しかもその基部の両側面に彎曲したものが観察され、これは着装をより確実なものとするためと考えられる。そこでこれに着装される柄の大きさ（幅）は石銚のそれを上回することは考えられないであろう。同様な石銚の基部と柄の関係を示唆する資料として D 類がある。D 一類は長三角形をして基端に抉入のない一群であり、ちなみに基端の幅は三 ～ 四 cm 前後である。基部両端のかどにかえしの効力をもたせるとすれば、柄の幅は当然基端の長さより細くならなければならない。D 一類が推定されるであろう。崎瀬出土の D 一類の石銚は胴部の両側に小さな挟りがみられ、しかもその箇所は潰れて他の側面に比較して丸味をおびているのである。この痕跡はあたかも紐ずれを彷彿させ、柄の着装を意図したためのノッチと考えられ、これからすると柄の大きさ（幅）は二 cm 前後が想定されるのである。D 二類は D 一類よりさらに一段と着装の工夫が施されているとみれよう。すなわち、基部側面の彎曲が顕著となり最大幅が基部におかれるのである。しかも基端に彎曲したものがあらわれておりこれはかえしの効力を一段と高めることに結びつくであろう。二・八 cm ～ 四 cm の石銚の幅から D 一類と同様に二 ～ 三 cm の幅を有する柄が考えられる。D 三類はこれらより一まわり小形であり、当然それに合った大きさの柄が装着されたであろう。銚形を

した大きな扱りのある基部を有するE類は扱入部に幅一・五〜二cmの柄を装着すれば両脚はかえしの効力を充分に發揮されるであろう。しかも胴部中央から基部へかけての彎曲は柄と石鋸との固定を一段と強めるものと考えたい。このようなことを考慮するとF一類の基部より鋸歯状の整然とした扱入部は獲物に対する殺傷力の効果とさらに着装を容易にしかも強いものにする働きが意図されているものと考えられよう。F一類の資料数は必ずしも多くないが、扱入部間の幅は一・五〜二・五cmであり、これに相応した柄の大きさが推定されるのである。F二類はその資料がさらに少ないのであるが両側面に認められる扱りの状況から二cmを越えない位の幅をもつ柄が考えられるであろう。

一方、大形の石鋸と考えるB類の基部の幅は他の石鋸に比べてやはり大きく四cm前後であり、しかもこのB類の最大幅が胴部中央から先端部より位置するのである。この事から幅の長さが四cm前後でしかも石鋸の半分近くをおおう柄の着装が想定できよう。最後に柳葉形〜木葉形に近い形態を基本とするC類であるが、これは基部の大きさにもバリエーションが認められ、柄の大きさもそれぞれに合ったものということになる。いずれにしても他の石鋸に比べてかえしの機能が期待できないので使用法なり対象物の違いを考えなければならぬのであろうか。

さて、このように石鋸の基部の状態から柄の大きさ(幅)を推測したわけであるが、A二・D一・D二・E・F一の各類はほぼ二〜三cm内での大きさが、さらにD三・F二類はそれよりやゝ小形になる可能性が考えられるのである。A一類は両者に比べると大きさに多少バリエーションがみられる。一方B類は四cm前後の幅が想定できるであろう。

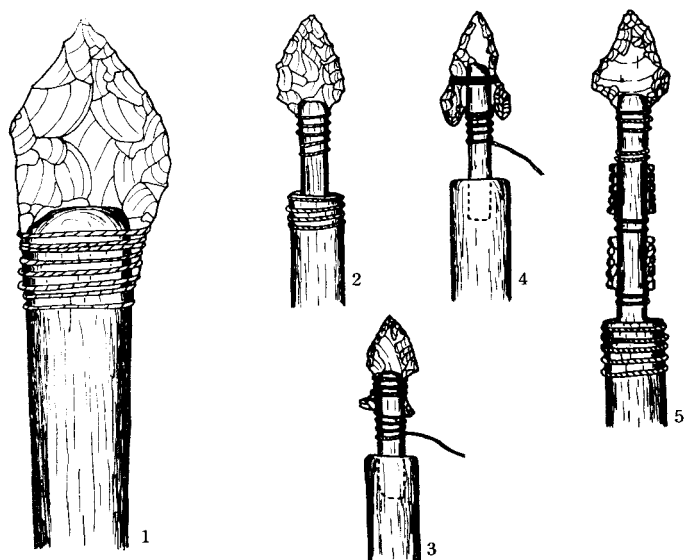
柄の大きさで次に問題となるのは、石銚の基端から先端部へ向つての長さである。すなわち石銚に対する柄の占める大きさ（面積）がある。これについては舌状の基部の長さ―基端から肩まで―によって、また両側辺基部よりの彎曲および袂入部の位置からある程度の推定は可能であろう。

A一類は二・五―三・五cm、A二・D一・D二の各類は二―二・五cm、E類は二cm前後、D三類はやや短かくはぼ一・五cmが考えられる。F類については二―二・五cm前後と思われ、c類は全体の大きさに違いがあり、しかも肩や彎曲が明確でないため不明と言わざるを得ない。幅が四cm前後と推定されたB類はやはり五―六cmと長く、これは大きくて重量のあるB類では当然と言える。

以上の様に石銚とそれに装着される柄の一部分についての若干の考察を加えてきたのであるが、大別してA二・D・E・F類とB類とに二分される。A一類は中間的要素が看取でき、c類については明確さを欠くのである。そこで、柄の大きさから、A二・D・E・Fの各類は中柄の存在が予想されることによつてはじめて銚としての機能が發揮されると考えられ、一方B類は中柄を必要とせず直接柄への着装が可能と思われるのである。A一類については両方の考え方がされよう。

次に石銚・中柄と柄との固定ないし離脱についてが重要視されることにならう。すなわち使用法に係わる固定式銚と離頭式銚の問題である。中柄の存在が考えられるものは固定式石銚と離頭式石銚の両方が考えられるであろうし、直接柄と着装されるものは固定式石銚と判断すべきであらう。

固定式石銚I型（第一七〇―I）これは中柄を用いず一定の太さと長さをもつ柄を直接装着できるだけの大きな基部を有する石銚である。つぐめのはな遺跡のb類や西市来貝塚出土の資料などから想定されるものであり



第17図 石鋸の着柄予想図 (1・2固定式石鋸, 3・4離頭式石鋸, 5組み合わせ式石鋸)

またA一類およびC類として分類した資料中の大形のものもその可能性が残されているであろう。

固定式石鋸Ⅱ型 (第一七図2) このタイプの

石鋸は中形ないし小形のものであり、基部の大きさから判断して、獲物に向って投げつけるのに耐え得るだけの太さと長さが予想される柄をそのまま着装するにはあまりにも貧弱と思われ、中柄の存在が考えられるものである。そこで柄よりも小さい中柄と石鋸とがまず固定され、次に中柄と柄とが固定されるというように二段階にわたる固定の方法が取られたものである。このⅡ型の対象となったであろう石鋸としてA一類・D一類・D二類などの比較的大きなものがまず挙げることができるであろうし、E類、F類、それにC類についても考えることができよう。A二類はA一類の、D三類はD一類の小形としてそれぞれ分類されたものであり、これらについては次に述べる離頭式石鋸の可能性がより大きいと考

えられないであらうか。

離頭式石銛（第一七図3・4）これは中柄の存在が当然認められるという前提に立たなければならぬもので、中柄の存在という事では固定式石銛Ⅱ型と同様である。しかしながらⅡ型では中柄と柄とが固定されているのに対して、これは柄の先端部がソケットになっており石銛を着装した中柄の逆の一方をソケット内に差し込む点で大きく異なると考えるものである。石銛のA二類、D三類の小形のをこれに想定させておきたいわけであるが、固定式石銛Ⅱ型で挙げた各類についても考えられよう。中柄の太さについてはⅡ型と同じかやや細いものが考えられるが、その長さについては石銛の最大長よりやや長めのものが予想されよう。すなわちこの中柄の一方は石銛と固定され、他方は柄のソケットに差し込まれ、さらにその中間には獲物をたぐりよせるための縄（紐）を結びつける装置が必要となるからである。また獲物に突きささった石銛・中柄が体内から簡単に抜けることがないためにもある一定の長さは必要であらう。

組み合わせ式石銛

（第一七図5）組み合わせ式石銛は、石銛と他の石器を組み合わせる事によつ

て一つの石銛を想定するものであり、古くから形態の特異性が注目されている石銛（第二〇図）やサイドブレイドと仮称される石器などの存在から考えられるものである。⁵⁰ 石銛は石銛と同様に西北九州の海岸部の遺跡において集中的に出土し既に二〇個所を越えており、しかもその大半は石銛と共伴関係を示している。またその時期についてもやはり縄文時代中・後期であり、石銛の主体をなす時期と符合するのである。このように石銛との共通点が多く見られる事から両者の関連が強く唱えられるのである。さらに石銛F一類の形態はまさに石鏃と石銛二個を背中合わせに組み合わせたものと符合するのである。

そこで組み合わせ式石鋸は石鏃や石鋸の中で比較的小形なA二類・D三類それにE類などがその先端部につくものと考えられ、それと石鋸とが組み合わせるものとされよう。この場合、石鋸および石鏃の大きさから推定して、中柄の存在が予想され、その中柄の先端と両側面にそれぞれ着装されることになる。ただ先端部への着装が考えられる石鏃や石鋸の数に比較して、一遺跡における石鋸の数が少ないという一般的な傾向が看取されるので中柄の側面に着装されるであろう石器については石鋸以外のもの、例へばサイドブレードやある種の石鏃なども積極的に考えなければならぬであろう。いずれにしても中柄の存在が想定される組み合わせ式石鋸は石鋸の一つのタイプを形成するものと考えたい。この石鋸の中柄が柄と固定されていたものか、あるいは離脱するため装置が施されていたかについては判断できかねるのである。ただ石鋸先端部から側面に石鋸ないしその他の石器が着装された中柄の末端まではある程度の長さが推測されるため、離頭式よりもむしろ固定式の可能性が大きいのではないだろうか。

石鋸と柄ないしは中柄との装着の方法は全く推論の域を出ないわけであるが、弥生時代後期の壱岐カラカミ遺跡出土の長さ四〇cmにおよぶ骨製鋸(二二図)の存在は固定式石鋸の可能性を示唆している。⁵¹ また先に述べた壱岐の鬼屋ノ久保古墳の捕鯨図ではクジラの背中に何本もの長い柄が突き立っており、これなどは柄と鋸先とが固定されているものと考えられる。また平戸周辺や五島沖で戦前まで行なわれていた鋸の使用による捕鯨も長く太い鉄製の固定式鋸が使われていた様である。これらの事がどれだけ縄文時代の刺突漁にかされるかは疑問ではあるが一応の参考とされよう。

五、対馬暖流型漁撈文化

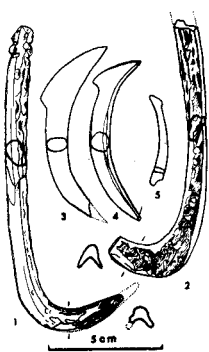
(一) 西北九州の漁撈活動

最初に述べたように西北九州における漁撈活動の研究の歴史は浅いわけであるが、近年にいたっていくつかの注目すべき研究がみられる。すなわち、貝塚と貝類捕獲に焦点をあてたものや「西北九州型釣針」(第一九図)や骨製の離頭銛頭〔第二一図〕⁵⁴などの漁撈具による釣漁業・刺突漁業の存在についてなどを挙げることできょう。

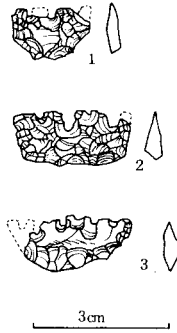
九州における貝塚の分布のありかたでは西北九州の沿岸部に集中することが明らかであり、他の東九州沿岸部や南九州沿岸部とは大きな開きが認められる。この事は漁撈活動の一つの形態とされる貝類の捕獲が極めて活発に行なわれた地域として西北九州の沿岸部が把握されるのである。また貝塚形成の段階として、前期・後期中葉が貝塚形成発展の時期として位置づけられているのである。

大形の結合式釣針は「西北九州型釣針」と呼称されているように、西北九州の長崎を中心に福岡・熊本において出土しており現在までに七ヶ所の遺跡が知られており、時期については後期に集中している。釣の対象となる魚類は釣針の大きさからマグロが推定されている。これらのことから西北九州の沿岸地域において大形の魚類を対象とした釣漁業の存在が考えられるのである。

骨製の離頭銛頭についても先に述べた釣針と同様に西北九州の海岸部の遺跡に集中しており九ヶ所が知られている。時期については縄文時代の前期から弥生時代の後期にまでおよんでいる。この離頭銛頭の存在は西北九州の



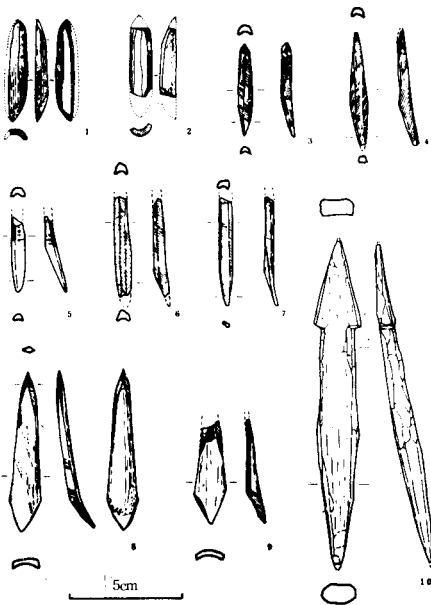
第19図 結合式鈎針



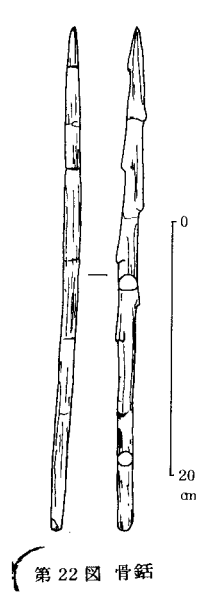
第20図 石鋸



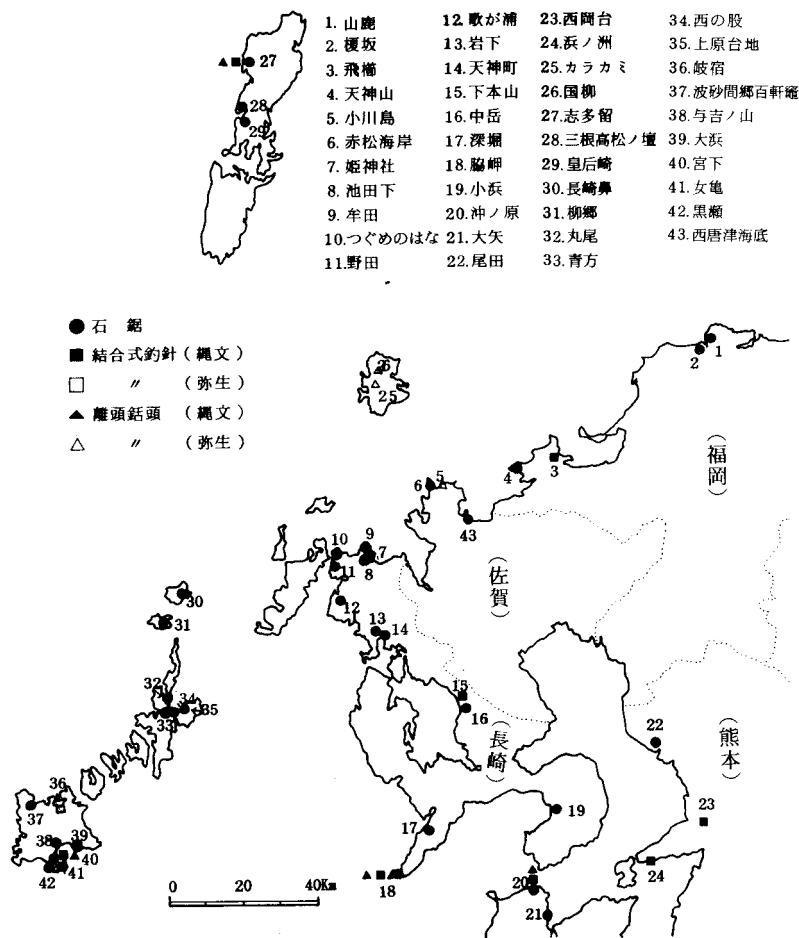
第18図 石鋸



第21図 離頭鋸頭



第22図 骨鋸



第23図 漁撈具出土遺跡分布図

海域に棲息する大形魚類の刺突による捕獲を示しているものとされる。

以上の貝塚のあり方や大形の結合式釣針や西北九州型離頭鋸頭、石鋸などの遺物の存在（第二三図）は、縄文時代の西北九州沿岸部における漁撈活動の特質を示唆するものであり、石鋸はまさにこれらの特質をさらに一段と強めるものとして、位置づけを行ないたい。

（二） 石鋸による刺突漁業

これまでに述べてきたことから最後に西北九州の沿岸部を中心とした地域における漁撈活動の一つの形態として石鋸による刺突漁業の存在を提起したい。

西北九州において刺突漁業が出現するのは一応縄文時代の前期初頭と考えられ、最も盛行する時期については中期から後期中葉にかけてが想定されるであろう。これは既に述べたように固定あるいは離頭の鋸と判断される石鋸や組み合せ鋸が考えられる石鋸などの石器、それに捕獲対象物と推定される海棲哺乳類や大形魚類などの自然遺物およびそれを間接的に示す遺物を出土している遺跡がこの時期に集中することから帰結されよう。自然

遺物の中で特に鯨類の骨や土器底部に観察される圧痕は西北九州の外海に面した海岸部よりも奥まった有明海の周辺や内陸部において顕著な状況を示しているのである。この事は外洋に面した地域とそれ以外の地域とのある種の交渉を物語るものとの解釈が導き出されるであろうが、それは同時に外洋に面した地域における海棲哺乳類の捕獲がかなり意図的に行なわれていたことを示唆するものと考えられないであろうか。一方、刺突漁業が開始され盛行する時期は西北九州を中心とする貝塚形成の発展段階とくしくも符合し、漁撈活動への一般的な関心の高

まりは西北九州の沿岸部においては海の幸に一段と恵まれる外洋に向ったのであろう。

捕獲の対象としては、結合式釣針によるマグロや離頭銚頭による大形の魚類が想定されているように、石銚も当然大形の魚類がこれにまずあてられよう。さらに石銚については、骨製離頭銚頭の大きさからはその捕獲が困難と思われる海棲哺乳類がつけ加えることになるであろう。石銚の中でも特に大形のものについてはその可能性が大きいと考えられる。

石銚による刺突漁業を考える際、固定式石銚として使用されたか、あるいは離頭式石銚なのかについての判断はどうしても容易でなく、また固定式石銚における索縄（紐）についても同様である。使用方法については一つの試論を展開したが、捕獲対象物の相異が大きな要因をなすと考えられるだけに今後の問題提起ともしたい。

西北九州における縄文時代の漁撈活動で認められる特質として、固定式石銚・離頭式石銚それに組み合わせ石銚などの石銚をはじめ、石銚、骨製離頭銚頭および結合式大形釣針を挙げることができるのである（第二三図）またその捕獲対象物として大形魚類と海棲哺乳類が想定されるが、これは前にも述べたように対馬暖流という基本的な環境の下にはじめて成立する漁撈活動の特質であると言えよう。そうであれば九州の西海岸を北上して日本海へ抜ける対馬暖流を介して対峙する西北九州と韓国南部の沿岸はこの暖流に棲息する海の幸の恩恵を共に賜わるものと考えられる。

西北九州における漁撈活動についての把握が十分でなく、ましてや韓国南部のそれについてのより貧弱な知識で彼我の関連を考えるのは早計のそしりを免れないであろうが、古くからその関連性の問われている東三洞貝塚の存在は今後の見通しをたてる上での貴重なものと思える。すなわち東三洞貝塚出土の遺物の中には西北九州の

漁撈活動の特質として挙げられるすべての資料をみる事ができるのである。すなわち鋸と考えられる石鋸・石鋸、結合式釣針、それに骨製の鋸頭などである。また自然遺物にあっては、アザラシは別にしても、クジラ・イルカ・サメなど西北九州海岸部のそれと符合するのである。

そこで今後の予察として、対馬暖流に棲息する大形魚類および海棲哺乳類を対象にした固定、離頭の石鋸、組み合わせ式石鋸および離頭鋸頭による刺突漁業と結合式の大型釣針による釣漁業とを基盤とする漁撈活動を「**対馬暖流型漁撈文化**」と仮定してあらゆる方面からのアプローチ、例えば、西北九州を中心として縄文時代の中期以後期にかけて盛行する黒耀石の縦長剥片剝離技術およびそれを基盤にした剥片石器文化との関連などが考えられないであろうか。

おわりに

以上、西北九州の沿岸部を中心とする遺跡出土の特徴的な一群の石器に対して、漁撈用の石鋸を想定したのである。さらに石鋸の使用法として、固定式および離頭式石鋸を予想し、またこれらの石鋸と関連させて、西北九州の沿岸で出土する特異な形態を有する石器とされていた石鋸を組み合わせ石器として石鋸の一つのタイプと考えたのである。このような石鋸を用いての対馬暖流に棲息する海棲哺乳類や大形魚類を対象とした「刺突漁業」が存在していた可能性について述べた。

一方、これらの石鋸と共に、西北九州に発達したの漁撈具として注目されている結合式の大型釣針や骨製の離頭鋸頭を含めて、縄文時代における西北九州の漁撈活動の特質と考えた。しかもこれらの特質が単に西北九州の

みに見られるのではなく、対馬海峡・朝鮮海峡を介して対峙する韓国南部においても知られている事実を重視し、西北九州および韓国南部において抽出される漁撈活動の特質がはぐくまれた基盤として対馬海流を考え、さらに一歩進めて「対馬暖流型漁撈文化」を提唱すると共に今後の基本的な問題提起としたい。

本論を執筆するにあたり、つくめのはな遺跡の土地所有者である平本信幸氏および鹿町工業高校教諭本山久雄氏は採集資料の実測・写真ならびに掲載を心よく許していただいた。また、松浦市出身で別府大学史学科在籍中の中村和正氏にはつくめのはな遺跡の資料の提供ならびに資料収集においてお世話になった。桑山龍進氏には五島女亀遺跡および天草沖ノ原遺跡の石銛・石鋸などの貴重な資料を拝見させていただいた。

さらに、西谷正九州大学助教授には韓国における関連資料について、また福岡市文化課山崎純男氏からは西北九州の漁撈活動についてそれぞれ教示を得た。

大塚和義国立民族学博物館助教授には漁撈関係の文献などについて教えていただいた。

一方、高松史朗大分生熊水族館館長には海棲哺乳類や魚類の生態に関する文献および貴重なご意見を伺うことができた。以上の方がたに心からお礼を申し上げます。

最後に、筆者が石銛や石鋸に興味をいだくようになった深堀遺跡・山鹿貝塚・沖ノ島の生活遺跡、それに榎坂遺跡等の発掘調査で常に一緒に、共に汗を流した故前川威洋氏は日頃から九州の縄文時代における漁撈活動に強い関心をいただいております。多くの点で啓発された。故人の冥福を心より祈りたい。

註および参考文献

1. 渡辺誠「縄文時代の漁業」考古学選書七（昭和四八年）
2. 乙益重隆・前川威洋「縄文後期文化—九州—」新版考古学講座三（昭和四七年）
3. 賀川光夫・他「深堀遺跡」人類学考古学研究報告一号（昭和四二年）
4. 永井昌文・他「山鹿貝塚」山鹿貝塚調査団（昭和四七年）
5. 小田富士雄「榎坂遺跡」日本考古学年報二四（昭和四八年）
6. 岡崎敬・他「宗像大社沖津宮祭祀遺跡昭和四五年度調査概要」宗像大社復興期成会（昭和四六年）
7. (a) 「つくめのはな遺跡緊急発掘調査概報」長崎県教育事報一五六号（昭和四六年）
7. (b) 正林謹「つくめのはな遺跡」日本考古学年報二四（昭和四八年）
7. (c) 正林謹・馬場哲良「つくめのはな遺跡の概要」長崎県考古学会会報二（昭和四九年）
8. 水野清一・小林行雄編「もり（鋸）」図解考古学辞典（昭和三四年）
9. 農商務省水産局編「日本水産捕採誌下巻」（大正元年）
10. 註1に同じ
11. 甲野勇「生産用具」日本考古学講座三（昭和三一年）
12. 石製の「鋸」ないしは「鋸先」と推定される石器はこれまであまり注意が払われてないようであり、名称についても明確にされていない。ただ側辺が鋸歯状を呈するものは三角形をした石器については、『鋸先状石器』（佐原真「縄文農耕に

関する諸問題」考古学ジャーナル二三、昭和四三）、『鋸齒尖頭器』（註20）、『鋸齒鋸先』（註18）、などと呼称されている。

13. 浜田耕作・他「肥前国有喜貝塚発掘報告」人類学雑誌四一―（大正一五年）
14. (a) 杉山寿栄男「筑前鐘ヶ崎の縄紋土器」考古学五一―四（昭和九年）
14. (b) 田中幸夫「北九州の縄文土器」考古学雑誌二六―七（昭和一一年）
15. 註3に同じ
16. 註4に同じ
17. 註6に同じ
18. 前川威洋・木村幾多郎「天神山貝塚」志摩町文化財調査報告書一（昭和四九年）
19. (a) 長崎県教育庁文化課「里田原遺跡のあらまし」（昭和四八年）
19. (b) 長崎県教育委員会「里田原遺跡展―弥生工人のむら―」（昭和五〇年）
19. (c) 長崎県教育委員会「里田原遺跡」長崎県文化財調査報告書二五（昭和五一年）
20. 萩原博文・久原卷二「九州西北部の石鏝・サイドブレイドについて」古代文化二七―四（昭和五〇年）
21. (a) 坂本経堯・坂本経昌「天草の古代」（昭和四六年）
21. (b) 坂田邦洋「縄文時代に関する研究、北久根山式土器の設定」考古学論叢三（昭和五〇年）
22. 鹿町工業高校の本山久雄教諭の告示による。
23. 別府大学学生（現佐賀県文化課嘱託）森田孝志氏の告示による。

24. 萩原博文編「金柑茶屋第二遺跡—周辺の遺跡—平戸市土地開発公社・平戸市教育委員会（昭和五三年）
25. 麻生優「下本山岩陰」佐世保市教育委員会（昭和四七年）
26. 坂田邦洋「韓国隆起文土器の研究」（昭和五三年）
27. 鹿児島県教育委員会「西之蘭遺跡」鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書八（昭和五三年）
28. (a) 清野謙次「薩摩国日置郡西市米村大字川上字宮の後貝塚」日本貝塚の研究（昭和四四年）
(b) 池上啓介「鯨骨を出土させる石器時代遺跡」史前学雑誌五—三（昭和八年）
29. 註5に同じ。
30. 賀川光夫「脇畔貝塚」日本考古学年報二四（昭和四八年）
31. 九州大学西谷正助教授、九州大学大学院田中良之氏・同宮内克己氏の教示による。
32. 桑山龍進氏の教示による。
33. 清野謙次「河内国南河内郡道明寺村字困府遺跡」日本貝塚の研究（昭和四四年）
34. (a) 横山将三郎「釜山府絶影島東三洞貝塚報告」史前学雑誌五—四（昭和八年）
(b) 及川民次郎「南朝鮮牧ノ島東三洞貝塚」考古学四—五（昭和八年）
35. 有光教一「朝鮮迎日湾外海底発見の打製石器」考古学雑誌三三—四（昭和一八年）
36. 塞ノ神式・相田式と呼称される土器と器形の面では一致するが、文様構成の上では違いが指摘される。すなわち貝殻文系の塞ノ神式土器は貝殻腹縁などによる刺突文、押引文などは口縁部に、格子状の篋描文は胴部にそれぞれ施文されるのが普通であるが、当遺跡においては逆転したものが存在し地方色のあらわれであろう。

- 河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿兒島考古六（昭和四七年）
37. 註7 (a)・7 (b)・7 (c) に同じ
38. (a) 清水宗昭「石材からみた九州先土器時代の問題(1)剝片石器原石の分布」速見考古二・三（昭和四七年）
- (b) 藁科哲男・他「螢光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(Ⅱ)」考古学と自然科学一〇（昭和五二年）
39. (a) 下川達弥「佐世保市東浜淀姫発見の黒耀石産地」若木考古七四（昭和四〇年）
- (b) 註38 (a) に同じ
40. 名取武光「アイヌの原始狩漁具（ハナレ）と其の地万相（補遺）」アイヌと考古学（一）（昭和四七年）
41. (a) 須田晄次「海洋科学」（昭和八年）
- (b) 日本水産学会編集「対馬暖流—海洋構造と漁業—水産学シリーズ五（昭和四九年）
42. (a) 久保伊津男「水産資源名論」水産学全集一四（昭和三六年）
- (b) 和田長三「漁のしらべ」（昭和一三年）
43. (a) 註42 (a) に同じ
- (b) 内田 監修「脊椎動物(Ⅳ)哺乳類」動物系統分類学一〇下（昭和三八年）
44. 三島格「鯨の脊椎骨を利用せる土器製作台について」古代学一〇—一（昭和三七）
45. 東光治「続万葉動物考」（昭和一八年）
46. 八幡一郎監修「石器・骨角器」現代日本考古学（昭和四四年）
47. 水野清一・小林行雄編「くじら（鯨）」図解考古学辞典（昭和三四年）

48. (a) 註45に同じ
48. (b) 東光治「万葉動物考」(昭和一〇年)
49. 註40に同じ
50. (a) 桑山龍進「五島の石鏃について」日本考古学協会研究発表要旨八(昭和二六年)
50. (b) 芹沢長介「周辺文化との関連」日本の考古学二(昭和四〇年)
50. (c) 賀川光夫「北九州西北部にみられるサイドブレイドについて」考古学ジャーナル一六・一七(昭和四三年)
50. (d) 註20に同じ
51. 水野清一・小林行雄編「カラカミ遺跡」図解考古学辞典(昭和三四年)
52. 山崎純男「九州地方における貝塚研究の諸問題」九州考古学の諸問題(昭和五〇年)
53. 註1に同じ
54. 田中良之「縄文時代西北九州の離頭銛頭について」FRONTIER 一(昭和五三年)
55. 橋昌信「縦長剣片—西北九州における縄文時代の石器研究一」史学論叢九(昭和五三年)
56. 横山浩一・佐原真「京都大学文学部考古学資料目録1」(昭和三五年)
57. 志佐輝彦「竜王縄文文化遺跡調査概報」教育佐賀八一(昭和三三年)
58. 甲野勇「貝塚鎖談」史前学雑誌三一五(昭和六年)
59. 西健一郎・他「荒田比貝塚」大牟田市教育委員会(昭和四五年)
60. 坂本経堯「古閑原貝塚調査抄報」熊本県文化財調査報告六(昭和二七年)

61. (a) 田辺哲夫「熊本県玉名郡尾田貝塚」日本考古学年報一五 (昭和四二年)
 (b) 坂田邦洋「曾畑式土器に関する研究―尾田貝塚」 (昭和四九年)
62. 坪井清足「御領貝塚の発掘調査」城南町史資料篇 (昭和四〇年)
63. 西田道世・他「阿高貝塚」城南町文化財調査報告 (昭和五三年)
64. 清野謙次「肥後国下益城郡当尾村大野貝塚」日本貝塚の研究 (昭和四四年)
65. 林田重幸「対馬志多留貝塚の動物骨について」対馬の考古学 (昭和五一年)
66. 金子浩昌「住吉平貝塚の脊椎動物の遺存体」対馬の遺跡 (昭和五〇年)
67. 山本愛三「杵岐原の辻遺跡の貝類」長崎県文化財調査報告書三一 (昭和五二年)
68. 鈴木重治「五島遺跡調査報告―三井楽貝塚」長崎県文化財調査報告書二 (昭和三九年)
69. 坂田邦洋「曾畑式土器に関する研究―江湖貝塚」 (昭和四八年)
70. 賀川光夫「宮下貝塚」長崎県文化財調査報告九 (昭和四六年)

図版・挿図の引用

- 図版一、1：註56、2・3：註6
- 第三図 11：註18、12：註19、13：註20、16・17：註23写真から作図
- 第四図 18：註24、19：註26、20・21・22：註27、23：註28 (a)、24：註35、25：註34 (b)、26：註35、
 第一一図 42・47・50：註7 (c)

石 鈿

―西北九州における縄文時代の石器研究二―

第一五図：註 47

第一六図：註 40

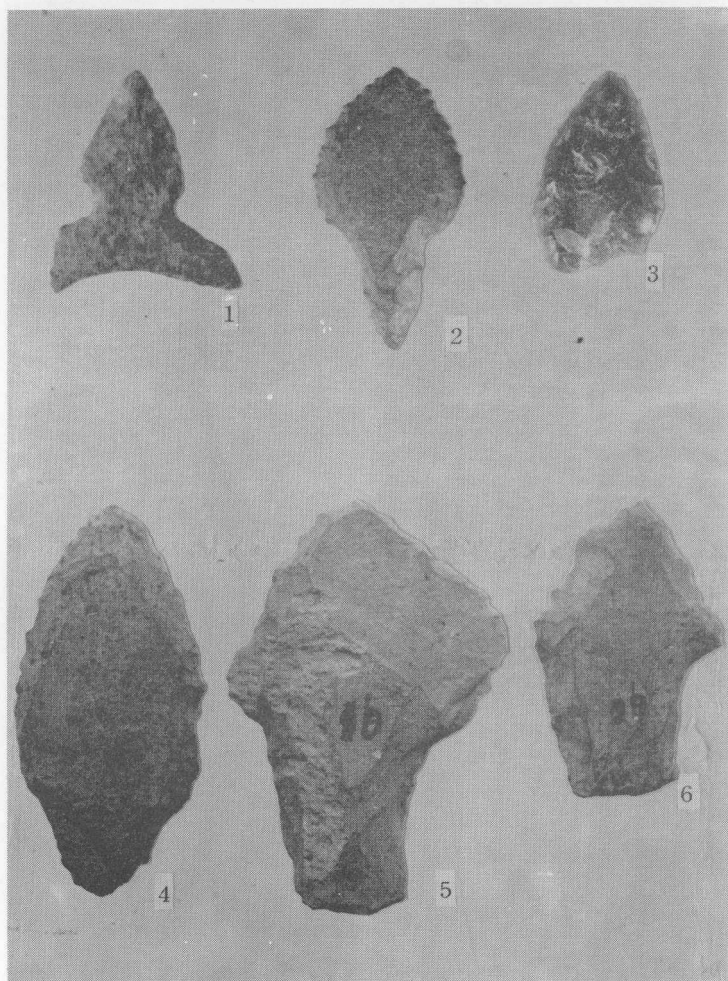
第一八図：註 25 (1 下本山岩陰)

第一九図：註 1 (1 浜ノ洲貝塚、2 下本山岩陰、3 志多留貝塚、4 宮下貝塚、5 桑原飛楯貝塚)

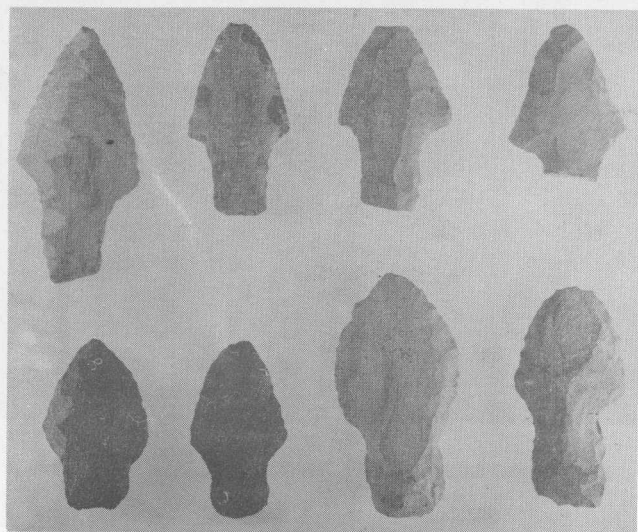
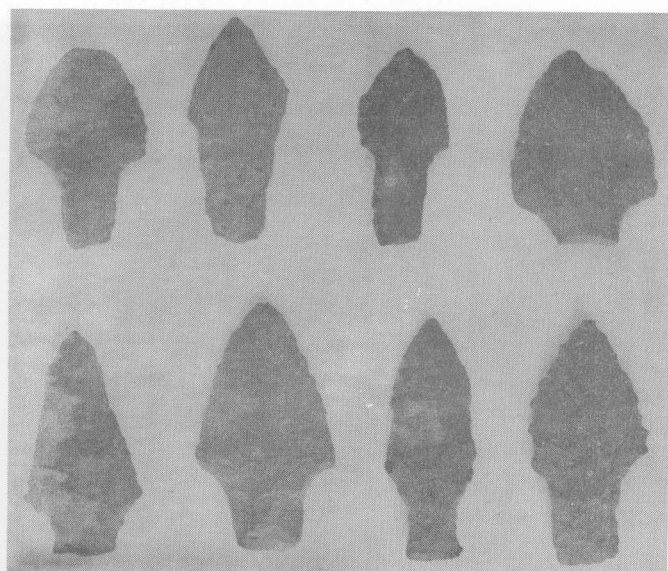
第二〇図：註 18 (1・2 天神山貝塚)、註 4 (3 山鹿貝塚)

第二一図：註 54 (1・2 江湖貝塚、8・9 国柳遺跡、3・7 岐宿貝塚、10 カラカミ遺跡)

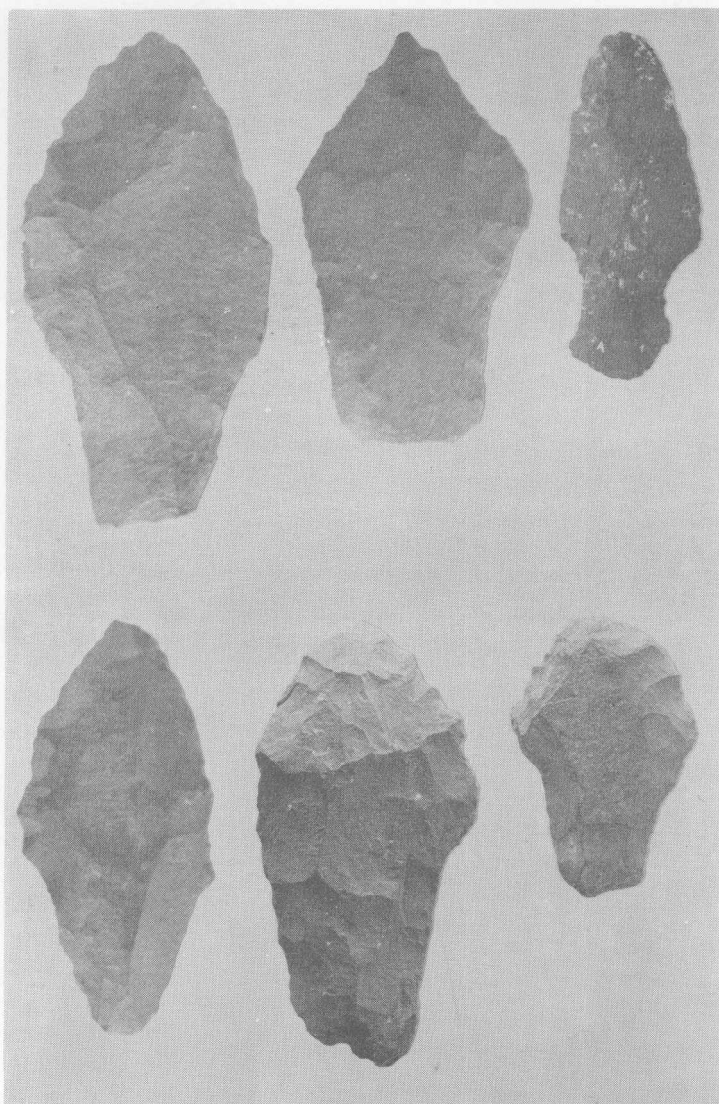
第二二図：註 51 (カラカミ遺跡)



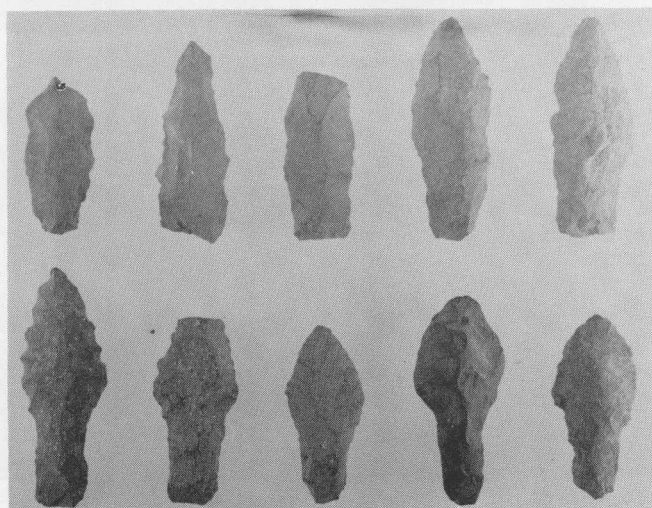
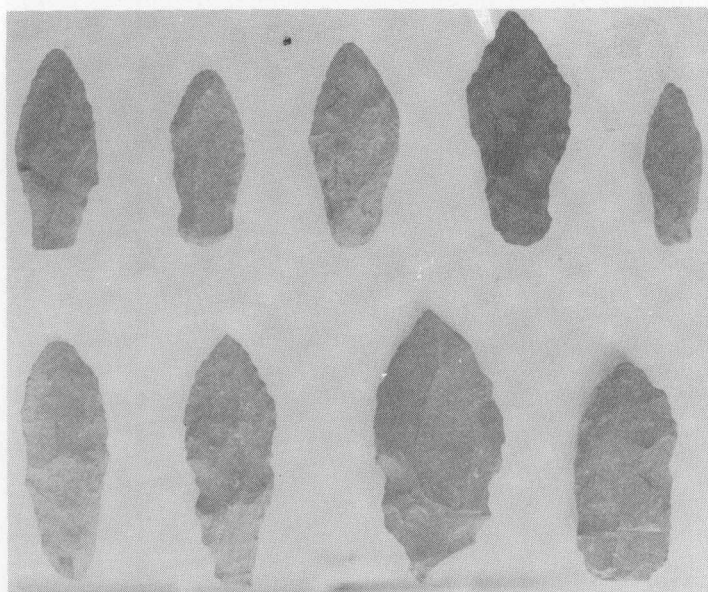
図版1 各地の遺跡出土の石銛〔1有喜, 2・3沖ノ島, 4～6鐘ヶ崎〕



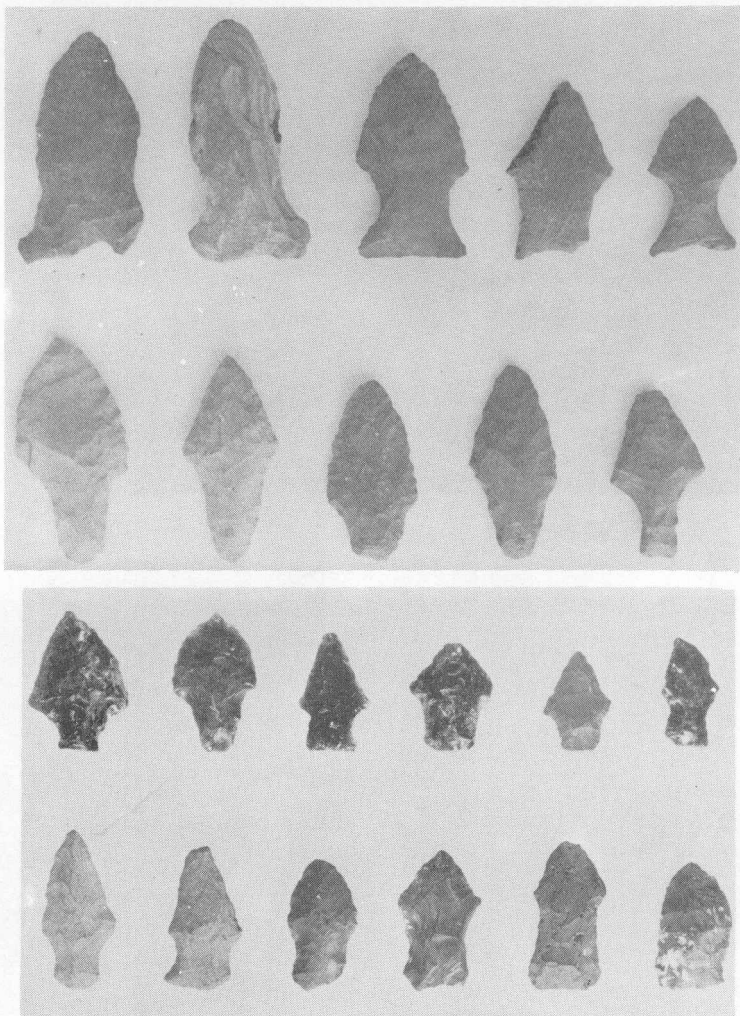
図版2 つぐめのはな遺跡の石鈚(I)



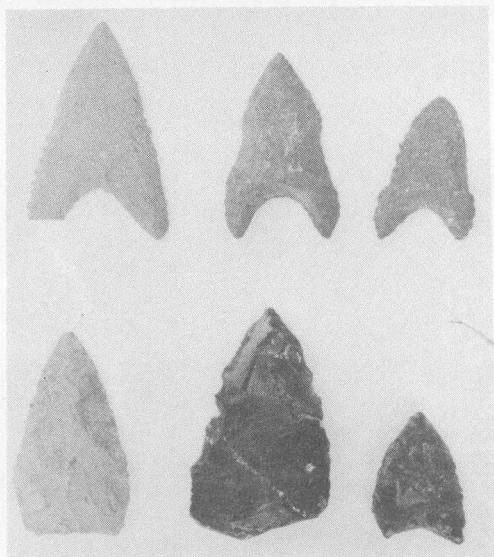
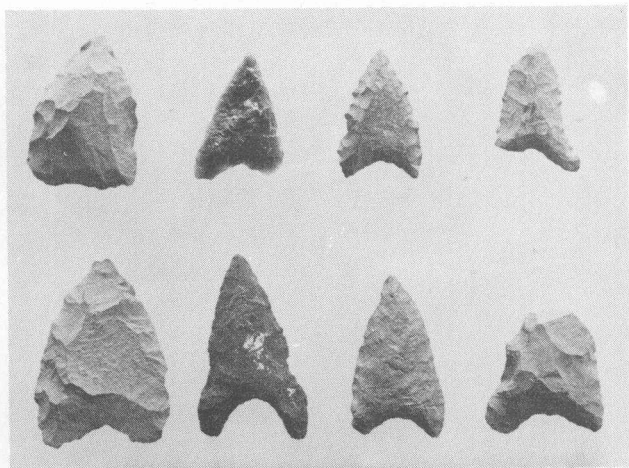
図版3 つぐめのはな遺跡の石銛(II)



図版4 つぐめのはな遺跡の石銛(Ⅲ)



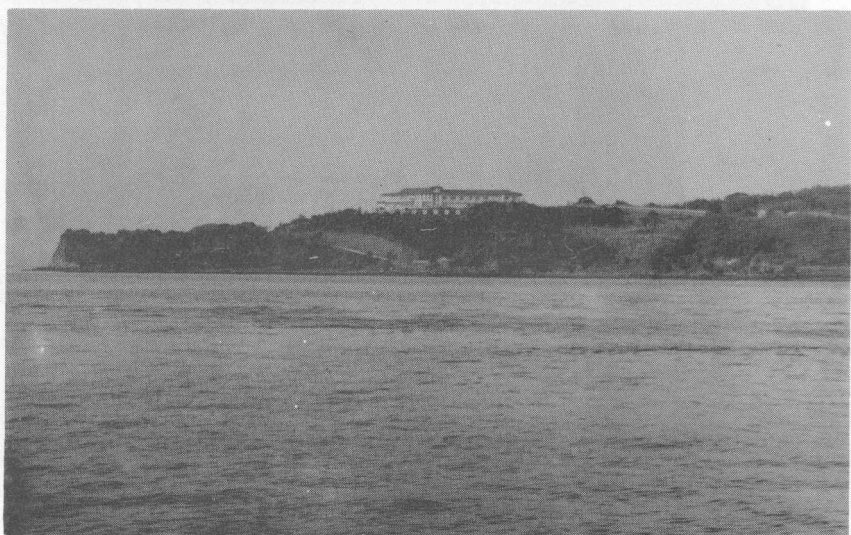
図版5 つぐめのはな遺跡の石銚 (IV)



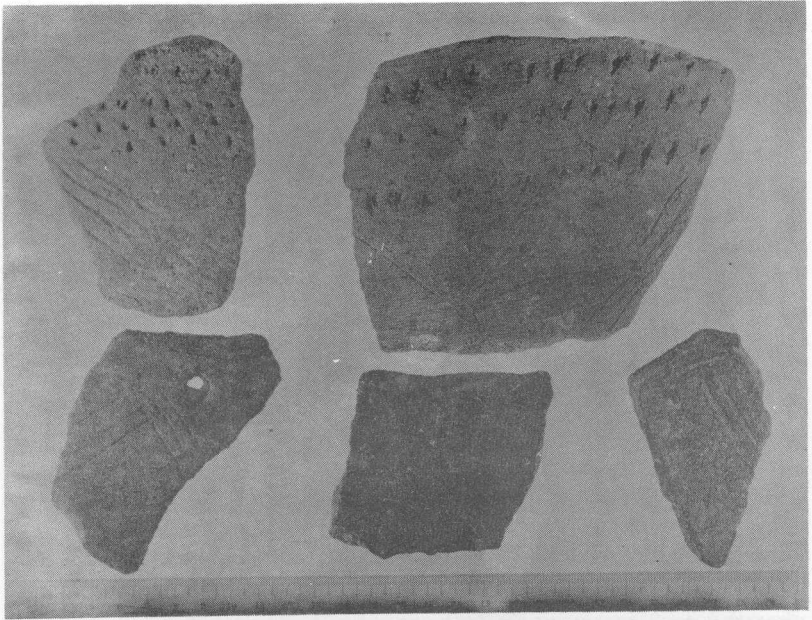
図版6 つぐめのはな遺跡の石鏃(V)



図版 7-1 つぐめのはな遺跡の近景（対岸は平戸島）



図版 7-2 つぐめのはな遺跡とハエ崎の遠景（平戸瀬戸の海上から）



図版 8 つぐめのはな遺跡出土の細文式土器